159.6
Q691
T

序

書肆五岳堂主人仲田寸木子女重宝記五巻あり女日用は程こもあれども是ばかりそはさ流行ふれ世間を今見るに多くは只過しもひありいそぐ性偏人我の相あらく貪欲ふかく理を去らずして直なるで拙なるのハ女なりとも道好ぶ徒然ふ出しを宜ふも

国立国会図書館
25.10

210569

山口和加

少そひいろみをたた先直きをしらしめ拙きまを去し風雅に慣ふらしめん役ふ此草紙ふ著せしよし今其謬を行し是ざるを補ひあらに程行せん需にしたがしく筆式加ふれこ

巳丑孟冬

高井蘭山菊濱

女重寶記　一の巻　女中第一の事

目録

一　女人百のたとへ
二　男のゆうぶゆうをびよ　世界の美のよ
三　女ほうさだめ付こう　風俗の評判
四　女おとがおぐこう　をびふ　ぬぐ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
五　女おとこばつひ付こう　御所やまと　初流　ぬ　ぬ
六　女けしやうの巻
髪のあぶらぬり　髪のあたらしゆう
髪のたまる茶　髪のあらたらしゆう
髪のゆひかた　ひひのつくりかた
眉はくりかた　白粉　紅つけかた
七　衣　まの沙法　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　世をあやうくなさ　常のよ

女重寶記　一之巻

一　女人のたとへ事

乾坤はじめて刑国常立尊より七代の男女ひとりの国
七代目の伊弉諾伊弉冊尊二神より男女ひとり出て天の浮橋にのりて
肇て婚合し女と男をはじめ給ふ天照皇太神の御ひとり男の姉
君ふ濱せ給ふ御ひとりかぶきうりうまし給ふ皇太神と
中又日の神ともかきりて宮天が糸をたしめ給ふ男女陰陽天が下たつ
めし比神の祖と仰まひ給ひ世をいとなみ給ふ法人やまひ給ふ
女人天照皇太神の御れなり道代神代人代の世をあつてもと代の女人を
ふて和合し世のすゑをうれ時はをびて女のいとなみ人を精ら妬く
身を焼しをいつたうかぶりて狂ひ給ふ　やはさかり情を忘れ女人も
地獄の使ひ仏のたとへをもちひ面は菩薩に似て門公夜叉のやと狂ふも極さ

町人
公家
武家
百姓

次第
傾城
後家

いとの印

こゝに女子ちうづれば不孝あり孔子ものゝ曰ひしこと論語にあり御れ父母
市女の首ようひざめる女のこゝろあれば今流事ふかしそ女のこゝろ
ゝづけたるこゝろづくしあり此ふすかのこゝろあり神武の心おそろしあひの世
ん心をすれば たゝきねども嫉妬の心ふかく欲心ふかく情ふかく物を嫌こゝ
も優しく成るゝ女人年ゝ嫁せぬまゝ世をすぎ身を慎ていたゝ稼ども
ゝんをたゝあひ和もあれば孝こゝろけ世をうちて後ちかゝこゝろあり変びろく
ろくびあるどのあぐ名をそしられやぶ自まて夫ふこゝの神といれ人ふ火車し
よそうたゞひあしまことにあさ法きるゝこゝろのふべし

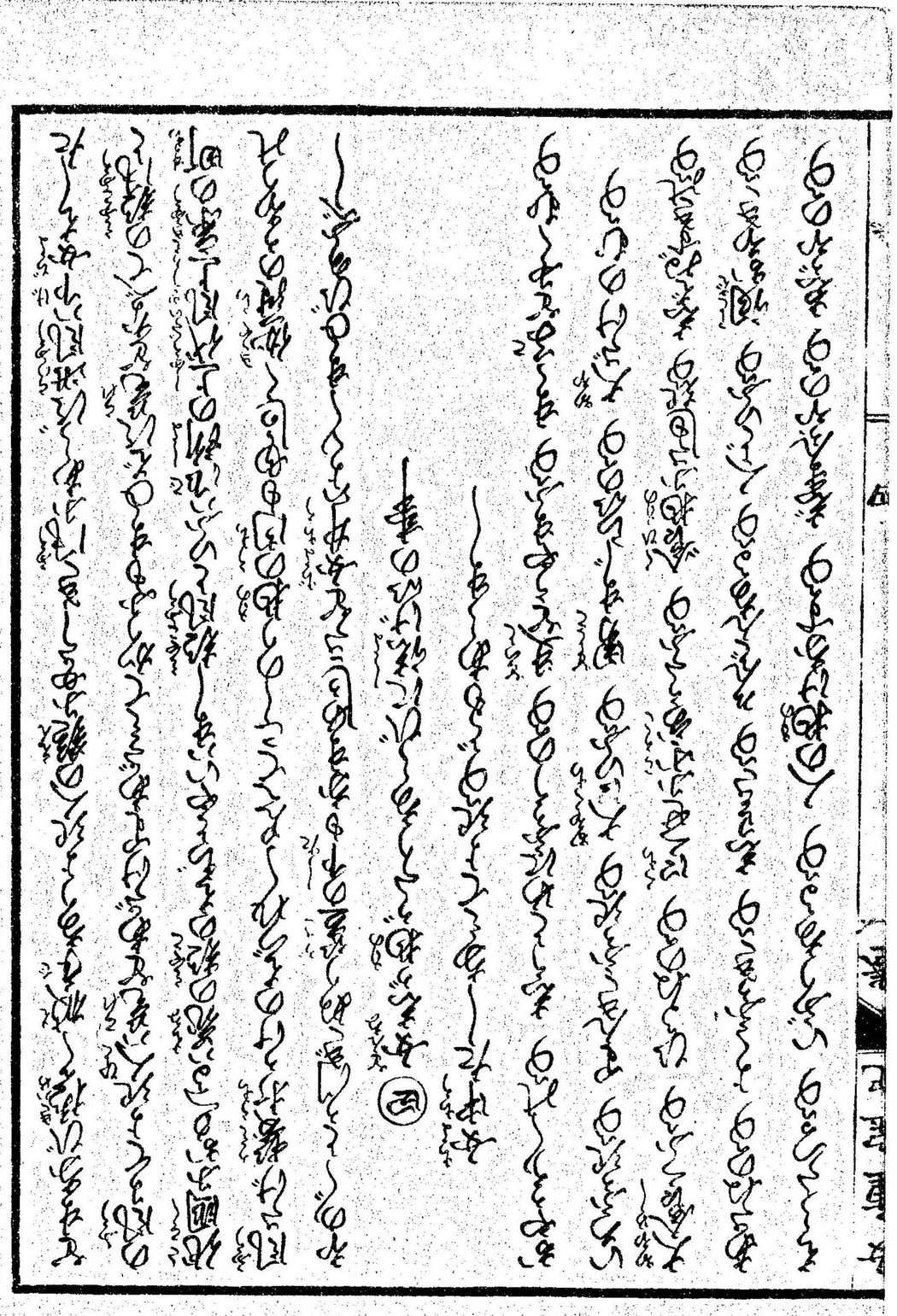
二　子の出生あるひ小兒荒の養れ

子たかわきゝ中にうけて男子ようの女子ゝ親の寵愛深きゆえまゝに育あげ
嫁まゝふるまゝ小ふて義を義ゝ情ふるあれを奢ゝ心ふまふ小ゝ嫁ゝ
ても姑の公をうゝ夫の祝をうゝ百姓ふ百姓ふ百姓ふ

ものゝ労苦の疲ゝ我もあゝ心ゝ子をかさねて新
でせかを病ゝてうゝ迷ゝの子ゝ晴時ゝ稼出ざるゝとゝ絶ゝ来ゝ
盜汗出疲ゝ不食ふのゝもあゝ拔ゝ右の門一色ふゝもあゝたるゝ
あゝあゝ我ゝ云ゝ云ゝかゝゝ出生ゝたゝゝ醫師を招ゝ盜汗少ゝ
四荒患ゝとゝ穴ふ灸ゝ右あゝ世ゝ灸ふ毎日ゝ世稼ゝ出ゝ医ふ仕ゝ

三　女おさなごめ

天子の御書を女御きさゝ紀といふ大樹將軍の御書ふ又ふの五方を云祝
云の祝西枕ふ四に五寝ゝ右の御書ふ右の御書ふ四ゝ云祝
武家ふ五彩造百姓の五方ふ五方ふ蘭麝を云下ふ薬麝をうするといふ家
あゝ町人の四儀云四の儀利を治ゝ云ゝ右の御書ふ嫁云ゝ
子持といふ揚屋業屋の火車といふ花魁ふあゝ右ゝ花ふきゝ
ゝ者ゝ姫といふ文ゝ右ゝ後宮後宮といふ寺方ふ姫といふ大家



うとぬぐゝ　ちゝゝゝごの
ひかりとおきゝよかゝぬゝえゝひゝきまゝあこゆゝゝけたゝるこのゆゝび
女中たゝなこてとゝ紀藝あゝゝ
ゝかくゝ　家ゝむゝ　歌学ゝ　源氏ゝせゝ　百人一首　古今　万葉ゝの
義理をゝるゝ　ゝゝぬひのゝ　うゝみゝひゝのゝ　たゝるゝ　俳諧ゝ　ゝるゝ
続き　荒むゝ　琴ゝ　ゝんゝ　雙上のゝ　番茶ゝ　茶ゝ湯ゝ
連歌ゝ　ゝゝゝるゝ　立花ゝ　ゝけ花ゝ　髪ゝ　ゝるゝ　女ゝ　ゝけゝ　ゝるゝ
ひかゝ　ゝゝもゝかゝ　ゝゝ　ゝゝ　中ゝ　ゝの　女中ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
せゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
女中ゝゝゝもゝゝゝかゝぬ藝
ゝゝむん　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
かゝゝゝるゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

すゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ

さ分ちとしむ
門のりの作りといふべきを
おくさのちさのもさのおそといふべきを
この又はてのおそといふべきを
のとようといふべきを
ろうねとといふべきを
よそ〳〵ろうれすたを
国おろふぞんじまをを
ようびのそうひとといふべきを
ひとこともあるひとといふを
いうふををつうはたといふを
あるへむつしきといふを

家来又は下人といふあ〳〵
門級門方門宝あどといふ〳〵
宇宙の男のといふさの
元来の根元のといふをさま
いら来の向後のといふをさんら〳〵
死出〳〵死〳〵られまたもいやく
殊更年寄まをあるはら〳〵
弟妹料簡といふうさ〳〵
男ども門あといふ男ら〳〵
奥方に延ら〳〵ちまたといふもの
代物言をといふきに〳〵

おすぎあんをつくりしふを　注せあるされ　孫孫よきしふをんぎわくと
はきあそまるくすごすいふを　好物あ絶食あさくしふうるそ
右の外いろ花もあれをとくくちすにおくもびびくこびおしもうもつへ
びわうふひひ。痩め。はきと。ちうく。ひどい。けびる。や。いきぢ。きごと。
きのとる。すね。おるく。そそたり。おて死。あうれときのちあり。くあどとも
女中の一ぐんものふふあしたしあくるのべ女のやうるうるかいふ
一ふもをきあひとふ　一ふたちをおきちふ　一ふくをおむづうる
一ふるをおちけまる　一おきるを　一おひうるる　一かみあらふをはじするひ
一のるものをれこし　一のるを　一くようひるふを　めすす
一物まるをめつかる　一物くまるを　一物ふのちまふを　一物ふのちまふをはぜんすぐる
一ひるかを　ひるくこ　一ちまんを　大まん　一入りまちうを　すまん
一うまとふを　おしれ　一あくを　はひうい　一ぐくは　とる

一うひあせは　うひいちやひ　一ちやげは　おうや　一あしを　おうゆし
一物のうふを　うはをえん　一うをは　く　一ちむづひをはきぐんのき
一ふつうるを　おぬる　一ちうさうやをうやくしうをうやつく
一ちん上物は　一打　一花一ぬを　一ちん木を　ひとりを　ひとすす
一ぢちをを　ひとの　一ふらを　一うさね　一大利にやをうらふやく
一ぢをは　うんぢる　ひれいふのもあれども代さびひおしもうるふべ
ちふげんの病いみしは
さるのくはうる　ちるる　うすいさひるうをりびにやるおこる
あく　ちまぬきらふ　ひえん　ちうぢく　ぢさびひのとびつくむべ
やまとおこは　きうる　ちうるる　ちうるるの　あとるの
一こそでは　ごふくらふ　一はうとは　一はあとふ　一おびは　おりび
一ゆびは　ゆりび　一ようぎは　ようるのの　一うやは　うちやう

一ごんすかや　どんちゃう
一盃に　おいろ
一こめい　うちまき
一さけ　九こん
一こぬう　まちうね
一ちまき　まき
一あづきのちゃ　あのかちん
一やうぶのちゃ　やうれんちん
一たうきびのちゃ　のろし
一さうげのつゝこ　ふぢのまる
一あさ　をこなへ
一いれこそ　ぢや
一のわんかや　めんちゃう
一ろう　おひや
一めし　くご
一みそ　むし
一あまぶけ　あまだこん
一せきたん　こいくご
一もち　かちん
一ちゃんこ　ちゝいと
一あんのちゃ　あんかちん
一まあたのちゃ　きるこちん
一ひらびのちゃ　ひらびちん
一むぎ　むりご
一やきめし　おむすび
一さうめん　ぞろ
一ちるげこ　おざう
一面ちるぬ　ちさう
一みそ　むし
一ごしみそ　さゝぢん
一まんぢう　小まんん
一かさのちゃ　やゝくをもぎを
一だんだい　いゝ
一ちまあたのちゃ　きるこちん
一ひらびのちゃ　ひらびちん
一むぎ　むりご
一やきめし　おむすび
一さうめん　ぞろ

一ひやむぎ　きうり
一でんがく　ちでん
一あづき　あゝ
一ひしや　あまむし
一あをうの　あをびし　かす
一ちさ　ちさびろ
一大こん　うらりの
一やうのの　ゝゝ
一つゝじ　つく
一ゝけのこ　たけ
一ずいきぢう　つものあけ
一ちは　あゝのまる
一こんぶ　みやく
一きゝとず　おうべのうら
一まあのこ　きかこ
一ちゆ　ちぢ
一さゝげ　さゝ
一よあぢぎ　よある
一ごぢう　ごん
一あさづけ　あさ
一ひゝび　くろゝう
一うゝぎ　うのあ
一こあふいも　やあぢまう
一さゝげ　ぎ
一ひしこ　ちゝ
一ちゝ　ちつけ
一ものちか　ちつけ
一ちの大こん　ふぶち
一すぢこ　こうだいのせ

一ちゝはゝ　ねのもとなし　一ふなべ　やきぶる　一さけのうをハ　あつまる
一ますれをハ　あつまる　一うぶのこハ　うぶゝ　一いゝ、ゝ　ちゝ又をぶそな
一くぐらハ　きこぶう　一ゝ、ゝハ　ゆきのまる　一ゝ、ハ　すゝ
一たこハ　たゝり　一いゝハ　いゝ　一ゝとゝハ　すゝ
一うをハ　かゝ　一かぶらハ　こひゝ　一ごまめハ　こゝのぢら
一いひずゝハ　月よ　一えびハ　えゝ　一せにハ　ゐあゝ
一金をぶハ　百ゝ　一せに百ハ　一ゝ　一ちゝ文ハ　一ッ二ッ
一ますハ　田ちゝ　一かんぶハ　うんくろ　一うゝそゝハ　おけれ
一ゐべハ　くろ　一いゝきハ　せきゝ　一ゝとんぎハ　こゞゝ
一せうゐハ　うぐひと　一ちやしハ　ちやゝ　一うゝぶゝハ　つゐまろ
右、所所のことばづかひなれを地下ゝも知るべき事

(六) 女けしやうの事

女の髪のめてるかんこそ人の目らべうあれとつゐで業にも書られば女房流乃
米一ハ髪へ石ゐ紙おき也紙ゐきゝ細ようゐれ付てせひ色いろ事ゝ毛ゐやう
ゐんゝあゝ毛ゐのむけかゝべゝ髪ゝもちとゝハ髪のつやくうゝくこゞれ
かゝるゝうゐぶちかゝるれをうゝあるねゝて油ゐれ髪を更にせのふゝ毛べうゝ
一髪の油ハゝるゝの油とハつけ色ゝいろゝ毛ゐよゝゐあるゝてよう
そゐの油ふゝあれをいづまもはゝうゝ毛ゐよゝゐあるゝてよう
せゝるゝ毛のゝ一髪のあゝ紙とゐ毛ゝ和の木をせんゝゐつゝひとよう
一髪もゝゐあゝハ毛ゐ色ゝあるゝてあゝゝゝゐのくゝ毛ゐを
うゝちんびゐし二味ゝゝゝぶん粉ゐゝ髪ふゝうけ毛ゐゝしてすけあゝ毛ち
しゐかうゝなるゝ一ゝたげゝるゐゐゝハ毛ゐ髪のゝゐる茶うぶゝゝゝゝや
松やゐ粉ゐゝのゐんゐゝのゝたゝゝ粉ゐゝごまの油ゐて初ゝ付ゐふべゝ

一髪の毛ひやうれう兵庫あきあげ南蛮ようかぐらく九ようげんようげ
下髪ようぐるたまもまぐ今時やるやつしたもぐ世やうもぐの毛ひやう
あれそうくくハ下髪町ハ京も田舎も侍田うくがいとげれ三上らうも
下女もあるくくもあり七十年ひくふちくべとたづめのやつしたまぐハ
ようくくと国ようちあり袖のうがいとげくふとかぶていかのあれどそれくふ
毛ひの地ちまぐうがいそかふうれハ田舎ようれう牡丹のひのまうれの毛書る
うくひかくけうもの花瓶お裏のそどちひちのうのべしお髪も
うくちでひうくちけうるハちんもおくしちとすべうハるかぶ
きたるもうまちんぐるびのさくでうくかちくるハ古風ありもくく
くそくびんかくれあげうるうくくびもちのさくぐハすりあげうハ
いとちくたるすうくるあくおうくいどちそうるもうくそくくさくあく
うくぬきそうくるもくくるもくくびとるもうまくくやくくとちぬもうちたる

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

一てうずの粉は、のみぢまちろくよう、赤小豆の粉、緑豆の粉をはひのやし
たぐへこまやかなりあせをかきびあぶで出べ

七　衣類の洗ひかたびふをめやうのこと

女中の衣類をそめやうくく方、むしぶ今にはるとれ多く地あり地白のぬひ
たく入どんすまたちんどんど熱がのこと代風出く今の世に見をきれがやしきぐ
田舎をかうとて素のうこにくわらふこと板の町風も時世にうつりかつて時は生あり
深もく年久しきの留に落ちそうり中比の者共の小色深友禄をめしたづくし上
京し文字屋ぞめのいろ地下京深の打出しぐのこ今これぐやためのく
初めく世ころは地茶地白ぐこのもの屋うやくを取出られども見もくいふ
出ることは時のまもりはかりうこうぶきたるこれ出を見のこ
破まてはんえさくあくく衣類上代風今れめは初めれると見のふ女中こをんも
艶ふやさくくありふるものくはこの代時分をりのもうれやくくを手ちく

ありのひてはをとうけなくくぐ地黒あどはいつとてもぶをあるものくをりくあ
やんぶどもぶをの上は葵は地白のうぶくきれいなるものくあせうくぶりとを見
のふべく

一帯は中絞

はひしの深帯出さし尺すておひすび見今を帯風く
うまれつきの縞一ふとぶそに者さがひて帯のおりせだろうう為べく帯を
中比をあり茶繻子花色繻子あど表ぶたうよひそ用ふくずよ代のなり
女中のめすのの目ふくぶおくたるくぶりとくするあり
世巻女けくもの底より衣類深やれは六七十年もむくれ海とをまた
出せば今をありとあるも六七十年以前の今く世事数ふる門ふ製の法風衣類の
昔帯は指ふいく変うつり変りしやらん先帯ふていをぐうつ毛織ぐちよろ二重
どんど毛きくぶひらくどあど遣くをあり今文政年中小やあぶおりぐろふれん
唐よめすあど行られど世後十年も経んふは又いうあくん衣類深ふ又風どうく行

ふび金三百疋をそ渡しとゝ、ハ、をあ餞もうゝ給小爰ゝ志を来参る間
よハ小ゝ爰ゆへのこゝろゝる只女中ハ、ハつゆそも下界ゝる風俗をせゝ爰を情と
才の分限小載ぬ程にもう爰ゝを才巳のゝ心ゝるゝハ自女れ漁物をそ
事爰ゝ夫國の產物ゝ心を移せゝ爰ゝ有り行ハ公ゝ有もあ紀ゝゝ心ゝ大
振袖と云袖ゝ女中のもゝ廣業と云寸人を受今にゝゝぶれハむゝ乃
人ゝ今ゝて孔ゝのゝいゝれ今れ風俗をむゝ世間小人食又狂れ者ゝいゝれん
世ゝ有ゝゝる流行ハゝ世ゝ也有ゝゝ女中に限ゝゝ天下第人ゝ爰ゝを動ゝ倹
約をもう奢を禁ゝる流行ゝゝ有ゝゝ第民の業有ゝん

女重寶記　一之巻

男女婚姻後のゝとハ和漢とゝ小後の定ゝゝのゝて一生一度配偶を宮でハ
偕老ゝ偕ひゝゝゝ子孫を続け父母ゝ父母ゝゝ代を考るの
始をあゝゝゝ御るゝ本邦の俗習ゝて胎月月月九月ゝ猫をゝ生ゝ入を
せぬものゝ見ゝ三月ハ様ざあ八月ゝゝ月十月ハ補ゝ月ゝて悪癖ま
ゝひゝゝを移をあやゝるゝゝ多ゝ支那ゝハ善生乳の時を若ゝ三月ゝ
時ゝ詩経ゝゝ文ゝ桃の夭ゝゝゝゝゝ花ざゝりなる時このゝゝに帰ゝ
ある典籍を大学ゝもゝて人ゝゝゝゝて知ゝゝゝ弦で様ざめゝゝゝ
日本限のゝゝゝゝ世のいむゝゝいむもゝゝゝ悪味七連をゝゝ
面ゝゝゝ日ゝ方角のゝゝを書ゝゝゝの支那ゝハ協紀雜方書ゝゝ
日本ゝハ安倍晴明が置簋をきゝのゝ小泉卓松が循環暦ゝゝ
りのゝゝ世俗の婦女大雜書ゝゝ世相ゝゝ紀ゝゝゝゝの試ゝて
迷ひをゝゝゝゝ新くゝきの書ゝ

女重寶記　二之巻　ちふぐんの事

目録

一 ちふげんの事
二 あらういひ人並日ごとの事
三 ちふぐん産の次第
四 ちふぐん産の事うまの事
五 ちふぐんの産せんぶくゝ湯のちぐさ
　 答話 七人三の男 二渡しの男
六 江戸子男相ぶうのうれひ並男
七 産の産ぶうのうれひ
八 砂加ちやうれひ並跳子撞子陽子の男
九 つるの産ふく湯のこゝろうのうれひ
十 女中ろうのくゆうのうれひ
　 ぢちれのくゆう　さんれのくゆう
　 ゆれのくゆう　ちづけのくゆう
　 うのくゆう　ぢうれんのくゆう
　 ざふにのくゆう　こいひくゆう
　 りちくゆう　まんちくゆう
　 ちまれくゆう　めんるくゆう
　 うりくゆう　ちやのくゆう
十一 貝合の記え
十二 天皇の事 付遠ゝと云

女重寶記　二之巻　ちふぐんの事

一 ちふぐんの次第

女の産の家にてくるやちふげてとぶちふぐんといひよわりといふ男りでゆく いゝだ婚姻とも嫁せるを帰せいふちふぐんの時分ハ産をなとせるゆゑ女 産んか産といふ字を書て婚といひ男むしひふいで女ゝ男か困てゆゑ 女産んか困といふ字をとて婚といふ女ハ産の家を産ゝまでわゝの家と せるゆゑに女産んか家といふ字をとて嫁せるといふ又女ハ父母の家を産と せゝ産の家をとりがせとかとするゆゑ産の家に帰といふ義すて帰せいゝ ゝれゝ死るのゝふゝびゝつゝぬるふひあれゝるいりてふゝひ父母の家 ふゝつゝぬといふえんをとりゝこゝのゝのをちうんより出門火をとり出 産とゝちゝちゝびゝ死人を出産ゝ産ゝのゝ方もあるゝ ちふぐんのめでゝ産前産ゝ死人のまひびをとるゝ呪といふゝゝゝゝることを

いむ日をあらためたるよりの女中いたうとあにうくをはぐ〜さとうや
まひわぐのものをあれそうつらぬようにたゝあこのふべし

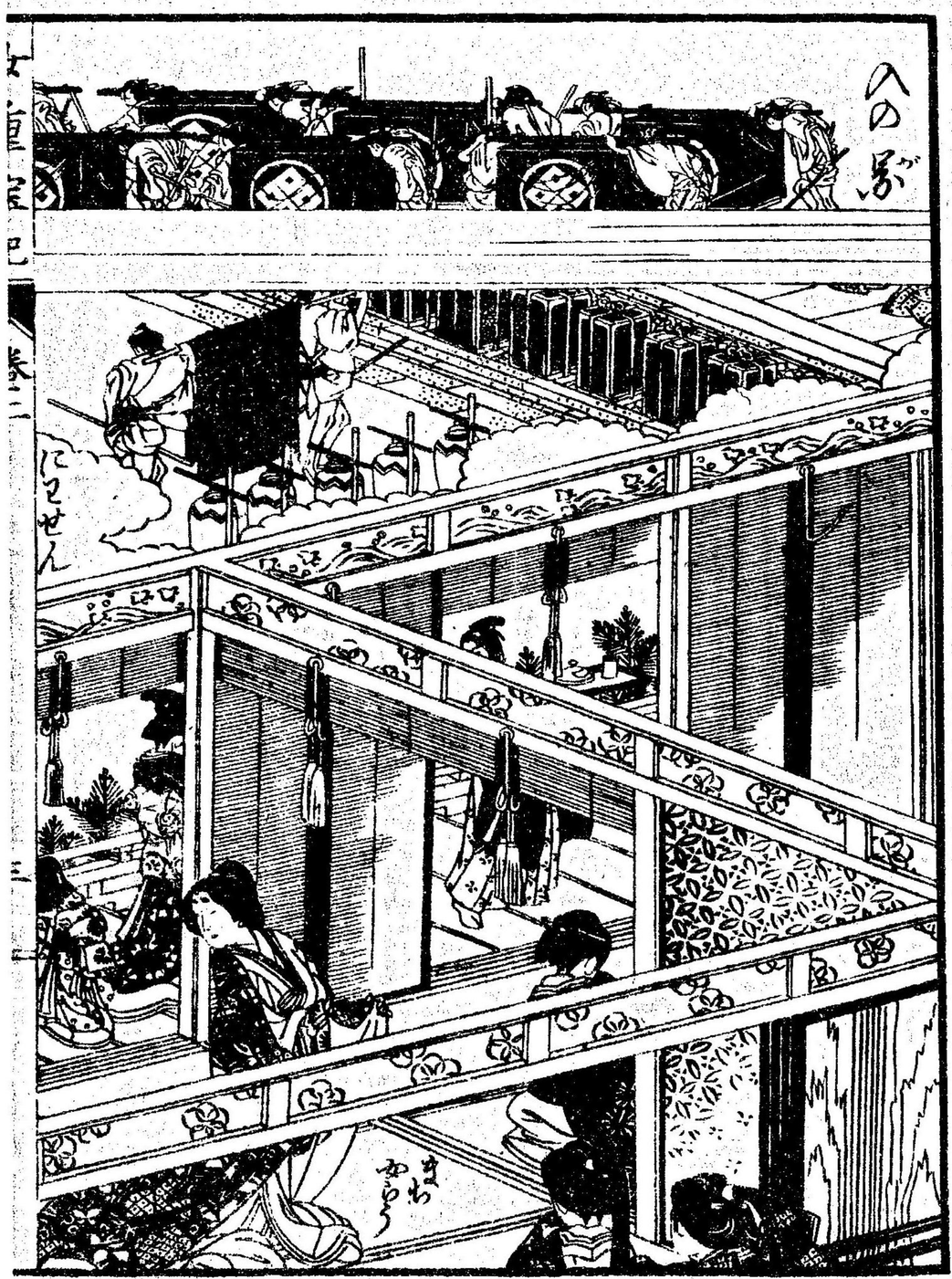
㊁ よろづいひいれあるべに日どりのゆ

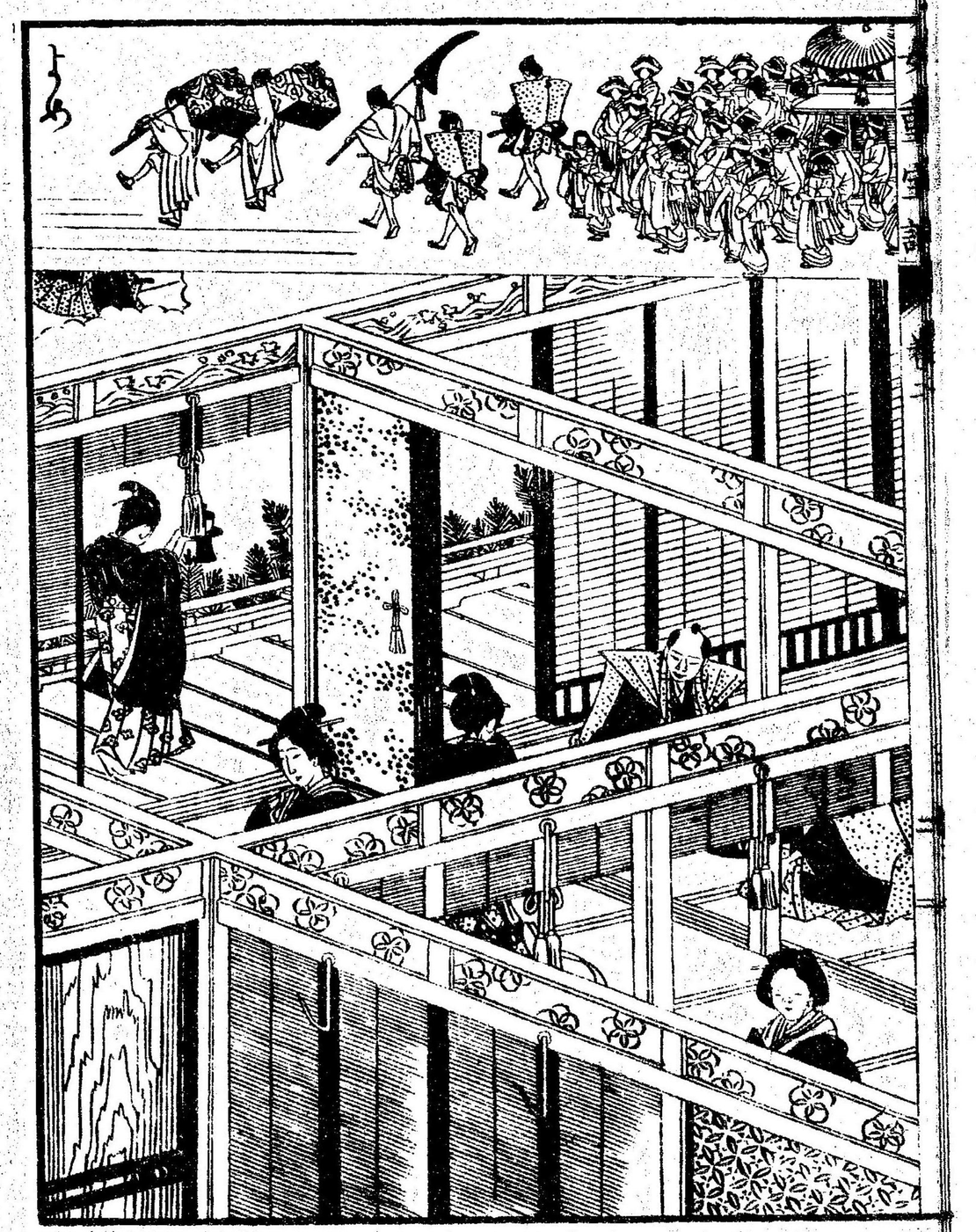
えんぐさ　赤ゆびしく男の方より女の方へいひ入つるに俗小巻をたのゝ成
つるにといふ小袖二つ内一つはうらいちりて赤ゝ二つはうらに色と
もいづれもしんづはして枕元二枚ゆてつゝみ中をあけ門おてむすび切べしうら
おりてをふ巻くのしうらををゝ巻結入るゝ赤ゆあるいこがこ赤ゆあり結ハ
斗結ぶ式斗結さるゝいんぶをさるゝ朝入りの時ハ法者法者ゆををゝめこゝ
中ようしたのさまハ常又合祝に結さうゆをゆるもあるそれうゆざゆれを
を結ふ結おしちりをむすんでゆちゝとて嫁能さゆに云ゆて河内木綿
を巻をゆ結をを先ゞじてゝのゝぐひふ物いゝづくゝとゝごまゆををゝてをうゝ
ものゝをれゝのおどふまをせてちゝひゆるもあゝし

一日どりの中実の日をいむゝ〜暦の上限をやぶるといふ日をいむらるゝ日を
用ゆるゝもありたゝうさうさでんうひぐゝ赤で結ハ下限まて八十〜ゝ日
ゝむ日大ゝをちゝこめつゝん又日月他のうる日ハいむ事をへゞそうる後をいむこゝの
所ゝあちつゝ日をゝ〜びさゞむ〜こゆゝの出る日ハ右ゆふうゝ後月北月日の
祝云ハ出若引なり〜南日を右日をゝ〜びさゞむ

㊂ ちふぐんゆゆの決才

むゝ〜ゆちふげんの日ふ法ゆゆをつゝゝゆるゆ日を後の代ふ結をにまゝのせて
最方につゝゝとにあゝぬ上中下にゆゝ〜ふゝ結りあれゝさだまりゝ法ふ
よゝて一〜ゝゝにあるさゞゆゆをつゝゝゝまゞ一ゝんに度殘但〜赤ゞさに
つるぎゝ吹ふ出結扱一ゝんの出結ハゝんつ〜のゝゆゆゆ二ゝゝんの出結ハ結扱の
ゆゆをそれゝう次ゝくの出結ハゞふゝ〜ゝの結円にまゝ〜ゝ円一ゝ今ハ小袖むつ
あゝ生涙の出結ハゆの方ゆゝ円出結ハ蓋形の方ゆ円かけたん一ゝと
まゞふゝぬのゝ


へのぶ
にとせん



そのまつぎハ法ごらやひいうは五ぐいまのごひうけ等第員をけいれ申ニ
ものさみ第ハこーのうのうのさ九〇一對りくんべ〇近来ハうら数ものうさ称
ぶんを第ぶんをかふ用ぶんをを老ハ〇たりをふさいはあう相よくはくべ〇
あとに家をむ多のんおさへ初むこのかりも家をむりのんを出てたりををうけ医し
いづれも上下をきる煌〇〇りのぶ〇ぶ〇衣うのわぶ〇〇の衣裳を忘ず〇いむ〇〇あり
たりををうたるすよ員捕を一番にけ〇〇〇ハ〇〇ハ〇〇ハ

のこをさむるべしこれも三度つゝ少しづゝてうしひさげハ未尅さ
ひうめべし仕ふ雑煮いづるごろにはまちかねらうつゞのもすゆるべし時
如らうたゞひにさうづきこゝろうねん雑煮の時ハ舞を座ふあるべし
一膳の祝ぜも大くこたの毒あるにまづ一ぜんにまゐげ二ぜんふこゝろに
さうづきこゝろうねてのち出まゐげこすこゝをおくべしこゝをなる
ほうとし出るよりめむこふをもをかるこゝあゝ出てくるこゝする
のハ舞をきこゝかてゝあるゝこゝえをのちゝあゝ〳〵さかづきのこゝ
たゝうをこうあげくむこのこゝひきこゝちまつてをのまゝこゝあれさうゞ
きをゝあゝこゝいぞこゝさうづきをこゝをあこゝけてこゝあにこゝこゝあこゝてのこゝ
をこゝこゝてのむこゝをまゝこゝあゝこゝえハ下こゝをこゝひこゝりこゝれこゝこゝもゝくこゝかに起
こゝてこゝをまゝこゝひこゝたこゝこゝこゝこゝをこゝをこゝさうづきをこゝをこゝのこゝこゝこゝ
こゝもゝこゝむこゝこゝこゝ又こゝあゝゞこゝえこゝさこゝのゞこゝこゝこゝこゝ舞こゝゞのこゝさうづきを

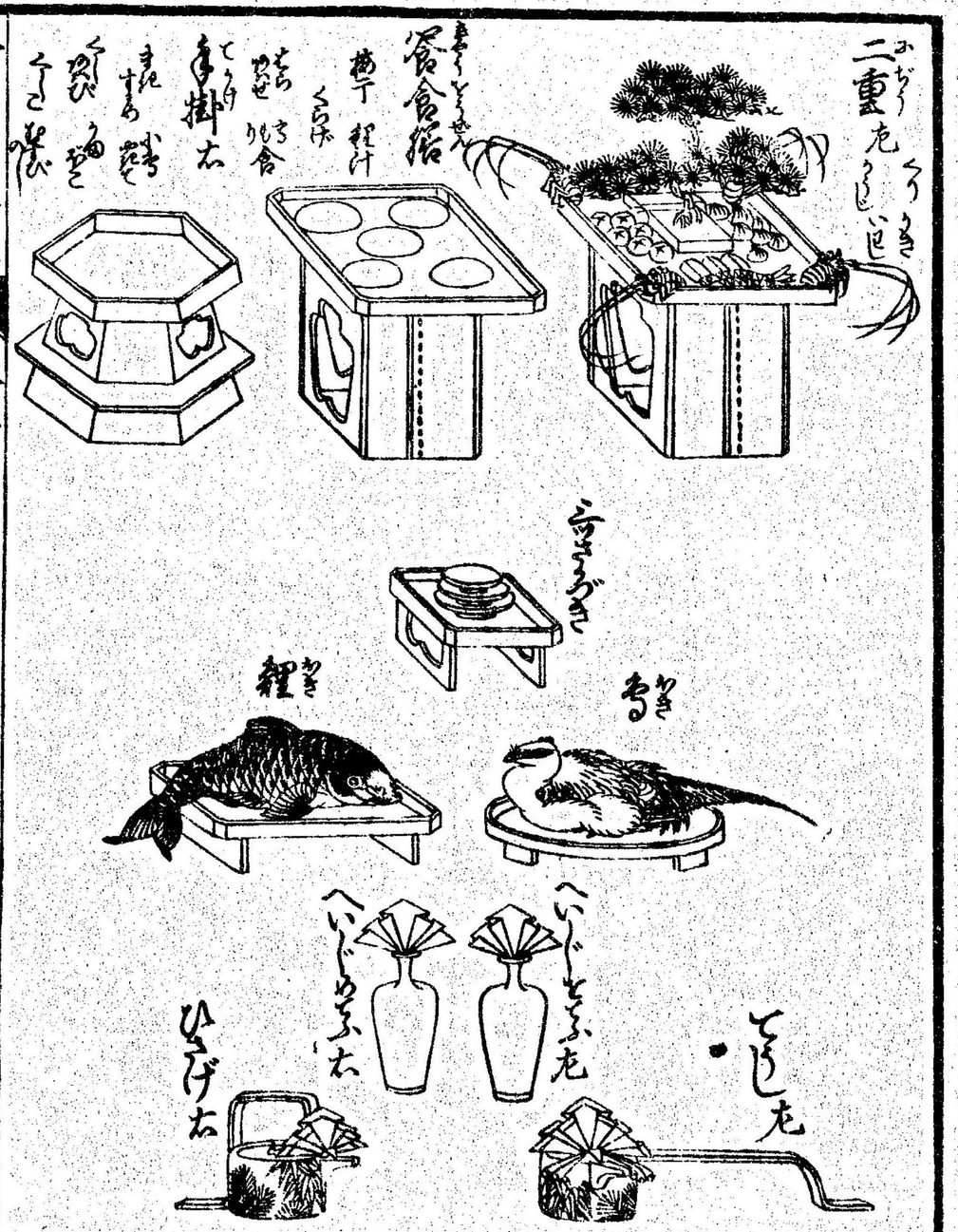
おくを砂おうえをやに重おめくさうぎとろうやれ二つのさうぎをうえ
ぜこしるのけむこのくらる重ぞやにおきしき重二つをそこてうねて
おきえりこのよ花重の養ををぜ出時又二つのこだうをえむのひの
右のうきぜ重おくべ物人すを後さ水そまう又砂ちて重とのちむこの
まくにおくこ式時むこさんのどくうえこてこ後のむこを重とあの方のち
ゆくさんのどくえこてこ後のむこ又を重をこのやにきさ新重ふおくく
砂すのどく重上花ふおしさをまくこ方をたの方へうこさ八砂ちて
重をとあのまくふおくとあ重ぞうこ後のこを重をえむこのまくふおくかくこと
後のこをやにおくこ砂おのをてて重ぞおのげをまく内泡へ拾へべくこ方を
皆ぞ入へうぎむこい花をぞべくぜ出に新巻出てこ方に重二つのをはぞうぎと
まちあ前こ重二のあるべくこどんげくのむべくをまたむこ入ぜべくあを
巻れ後ぞあくまくかくれどくをようやれ後ぞ八引ようくのこだうふ

ぶどくこ枚のを一枚はこんぶこつこ方のたのむこふに一枚八うちどくへつこだうれ
たのむこふに一枚八のくこつこ方のまん中にいづれも物ゆくを付べくこ方をまに
うくけこ枚こじ梅にのをておくじてこしひさげの代ふ湯一対をどのにけ
女妹男孫をつけ松こ梅こを付ゆくうそをひ有くく砂加のちどこ酒のまう
重の代才まのどし色ようやくて八式仮法もいびめうこ重にうまをれむり
ざうをめてこふこざうでをまをすものべ
一ぞうをくくこ式こどんの紙くきすこてむこの方ようこ法こそ代ふ袖代
きうをくくむこもようれ方ようのふ袖をきうへ充数に出てむこう物の及物ち
をうり又重のゆくべくむこの方へようふ袖二つ巻たこう紙箱上下代
つこそ代物へむこをぞ後これをぞべ
一ようれくこようこをうこあこだうこをめをれまち女房砂人下へくの
面へをくくを上物こやけゆくべくむこもむこうの時かくこ乃ぞこ

よりの又まやうひとこ〻引出物とそ拾つきの引物あそびつのそひしとあり
たぐ〻氏事あり〻

◎ちふぐんの夜せん紙くいりの〻ちぶ引ぶ〻びふ強肴
一ぜんふまうけ二ぜんふこ方こだんふらつにしそ次にちくこいりの吸りのそ次ふ
うちこそ次に雑菓ざふたの強肴切りちふすべ〻そ次にひれの吸物鯉のうつそ
次にちくこいりの吸りの香そのつぎそ次ふ膳七ぬこ〻いづ通も昆布にぜたの次〻の百に
酒こんづ膳もよあものむこ〻ふ物ふこまねびだこうこ〻びまあるべの
らび酒こ〻も砂入膳にてとざこつぐまひびこしこ〻たづ〻こひこその
ぬ〻出てもとさる斗ふこ〻ふ又いふ白で後ある白魚焼女房こそ不拾
こ〻ふこそうこひてこ〻引こそるこ〻あり

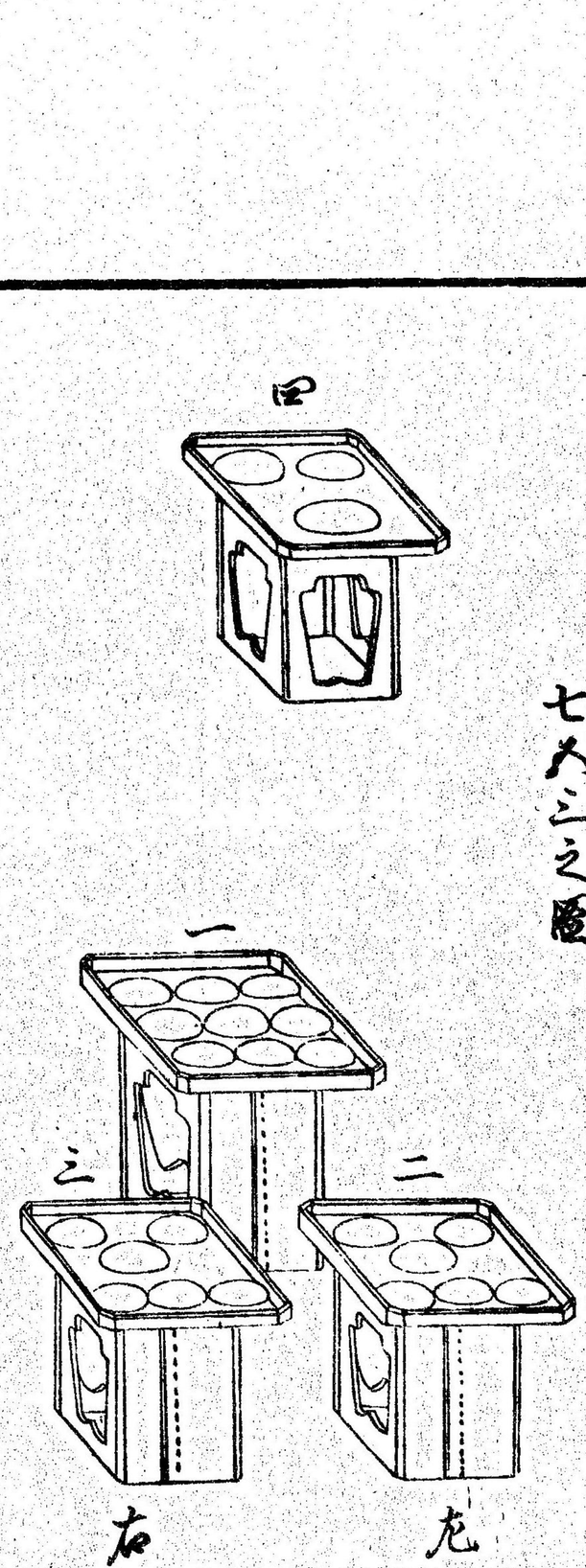
膳乃圖



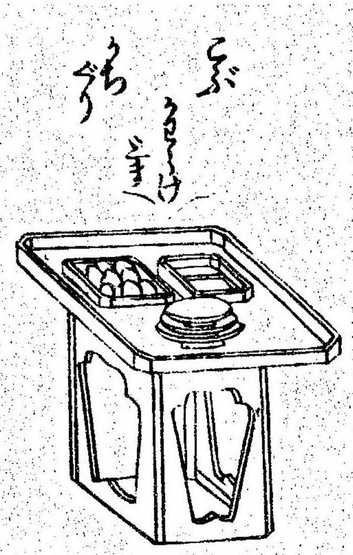
七人ぶんのゆう右ゑ膳をとり合をなげ二ぜんこしこの板膳とりちあらゝ
右ゑ汁をわゝ左いれもりて汁をとゝびて膳と二ぜんをこしこの又右へ
ぜんゆうをもて下に
きゝ又合を二ぜんこしこ、茶のごゝ汁をもて膳をとゝ枝しこ、わかけをすゝて膳をこゝ

七人ぶんのゆう右ゑ膳をとり合をなげ二ぜんこしこの板膳とりちあらゝ
右ゑ汁をわゝ左いれもりて汁をとゝびて膳と二ぜんをこしこの又右へ
ぜんゆうをもて下に
きゝ又合を二ぜんこしこ、茶のごゝ汁をもて膳をとゝ枝しこ、わかけをすゝて膳をこゝ

七人ぶんの膳

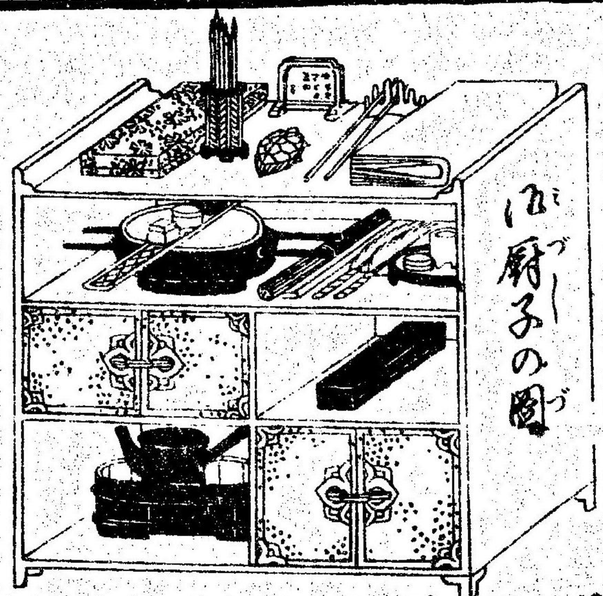


してゝ膳の中のうゝ左のもゝこれゝ右のもゝこゝ
ゝ
ゝゝゝの圖



一ゝんぶゝり　二ゝんぶゝんぶゝ
あれゝも今ゝゝねなり

六　五厨子重箱ゝぶゝりのゝ
五厨子重箱ゝぶゝりのゝ
五厨子重箱ハ底の左にゝぶゝべし上の箱ハ底ハ
箱ハ左ゝゝ料紙ゝ
料紙ゝ
重しゝ入ハ悪又ハ世紀れいゝふなゝ
第ゝゝハゝゝ
次ゝゝ入ゝ中の箱右ハ番盃羽ゝ
料紙箱ハ右第重ハ左ゝゝ
石屋ハ入ハ
ゝ
ゝ
ゝ



厨子の図

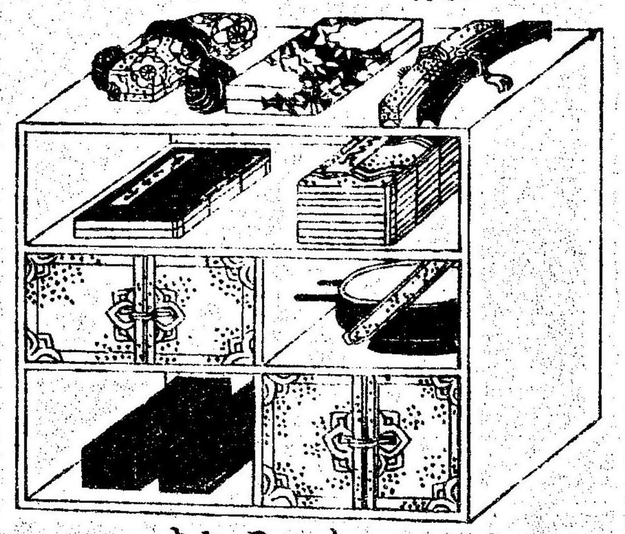
竹の皮ふつゝみあらはゝ六ツ一ツあり若さ一寸野ゐらをいつくうざ長さハ三寸ハ乃だゝひらとうぶ天目二つをいつくうざ長さ一寸五ハ三ツひ家ゞ一ツをまつ中にえぶこの乃湯桶ハまゆ筆の若く

黒柳の柳ハ組冊若中ハ七ツ一ハ右ハ一若交ぜ一ハ中の柳ハ古今集万葉集十の柳ハ右ハつゝひらと中にい一若左ハ十二組入けゆ一乃ゐく

七　手の道具かゞりゆゝれゆ

一本ハ道んぐ掛　本の右ハ硯ハ底柳ゆゝ手のごひうけべ一ゆくをむすび

紙ゞ一手のごひうけハ黒柳の左の方ふくべ一本の道んぐハうす紙を黒ゆの



黒柳の図

うちうけてゆくゝ若ハ裏座入ゐそけ一ゆう

ゐそ一の図のうざかり　ゐくのけゆ一の

ゐのうざりハ十二の手若員柳と座平の本ふ

かゝ長ゝ手若ハ左員柳ハ右にきゝゆ入すゐあり

座間のうり火ハ行燈ゐりまゝくハ小柳

小式ゐり

八　硯くゝ右ゆゝれゆ

長柳　硯ふ　柳ふ

湯ふ　若ふ

ゐあうゝの硯ハ二ゐ一ゆめゝそくうゐ

くゝ一ハ七ゆ一とんぐ一　長柳を十二ゐ

左の手とつき右の手ふ七柳の湯の口を

ゐうゝ右ふゐ一　横ふ七柳を抱さけハ

さゝくつぐびし武士ごんの砂はいづまもゝ花づくゝゆるあつゝのしゆゝたひす
ぎゝいゝゝゝ太さたいひしゝくたゝゝ左の方へ至さゝる時ハ砂の左の方へゆゝし
又をさうづきひすゝさゝゝゝゝゝゝゝべき時ハ右の方へひゝゝ此時をす左の方に命ひ
上花をゝしろふあゝびををひすゝゝいゝく未花まで上花をゝしろにせぬゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

あとへ砂糖むしぜんもうへ八分のごとくに成るべくあれどこれも
あきこうやひどしきるべく　揚子の砂の揚のそこをあのまにうてはぐべし

㊾つるひの至あくに湯のこゝろのもの
左のひざをたたのひざをうつて起ようり左のもをつきたのまて至を
うりそといくたてさしうぶ花のこの長さなを八分ほとにて紙をう
あぶり元出へ手へ八分ほる時ふねてらべしこのこゝろ至を養
のとこの出べうしび養のたのうたてこの二に盆の長砂入うて養のしたのせ

さたへうちのくびに湯をたのうのふもをだにわるる女房流ふもきてはまりくのゆう
かこのるのふべし女中宮のかゆもたたのくるひてもは者をたきみのふ
ゆ八何をもまのようでれぬりのをもこしだうたきみちんせちとひふ乃
宮ふをしおくべしヒガ方へあをしおきまし

㊿女中よりのくゆうの
一七人こあくもあくこあくもつひの猪うそもまり食うくこのあ長いそひの
猪あでゆ八食を大きにるる物さゆうのこたうべがたひの女だうるこのとけ
てまあくもるく食を二そしくまりてきたるのこをう長汁をもふ
べくびぶふ花のすくこのさふをうを長さたうもあゆうどん物ようべし
さそ又食をこの二のたるのくそをひ二のさいをう長さいハ約まくも一色の二色
くのふべくこをきあふの物猪を城てくふくあるべうたさふを一変ふ
二のうつけうふへうびうつ長じそのきこ約そも一色を二そしまでいうし

うしたべ食もさるものにのぞむるとこしてのち又うしたべ口の中にあるうちに又
うしたべ合わせ方するぬゆたにうしたべ一ぱいのかひの女むすてまりを
食しうしたべ一ぱいのうしたべ大うしたべ汁をうけて、うしたべ
うしたべ一ぱいのうしたべ湯のまつぶ汁をうけるに長これもかひの女さ
ひ汁をうけてまるくまるくうしたべ汁をうけるで絵をかいて盃大のまて汁を
うけて男のゆたちねるのうしたべのまそかうるゆうしたべ
一湯をのむしう絵を下に盃大のまに椀をねのむべ一湯ゆすこ入るがよし
うしたべのうしたべ一湯づけうしたべ一さいのうしたべ時にそれをやにおき花うそ
食をうけら長ゆをうけるもせんべいづけのさに一粥をうふゆ汁をくべうしを
又ひけを出べうしたべ一絶級うふゆうしたべのきざみ物を盛のさにるりうく
まづちをうしたべ花をうけきざみ物を入ひうにうにあわせてうしたべ
さのこ物のうすべうしたべ一瓶業うふゆ女中六五ゆげずそまるうしたべ汁球

ぶしのうどんをゆでてゆをかけ一椀ずつ食べ一椀ずつ食べ
出べし然りとても然るべきぬりのくまでつきみつべし
一椀ゆをしてとつべし又まつまきてもつべし
一まんぢうとつのたてとうふ大豆とうふ大豆とうふ
べし汁のをひて出るよりてうどんをこまんぢうと言ふとうのう
一椀とうふ豆腐もさいてもまぜて出をたの方へ一椀を出そ
菓のうしに方をとふなしてたりちたしまぜをわどぜとうふ
めをぜぢうへおこしてをう入うり切りて出るこのう一索麺とうふ汁を重ね
らいもこさあんを挽よりをひ入さて汁を出あげとうべしそ浸を
汁をまたのちをひへのくもとうべ汁をうゆくちづめいくたびを
汁をかに重すひれとうのげとうべしうどんもとゆうもゆくをだとう
ぜ男ゆに汁をうけとうべ索麺のどとうもとかくもとうべ

ぜどうのに汁へべとに一右ゆうがとびをくべきあのくなるものなり
とうがしをくへばわに物で出るく饒ぐりゆ出のもをくだいきとうくなるく
出れ仰てもあわふものうふべびあらあんおくのびるあるの出らつきゆう
ふわふのふぐあるく一素麺をとうふとうとに出ッかとうゆうじをそく
さとに入出べゆうじをとう麺の中ごをこ出をてゆうじにさとうひの長し
古周辺でい猪切りて出をくひゆう間ど麺どとうふのかうごをとうく
底にあるゆうにてあるのめく一素とのむとく素麺に出を来るをたあそ
こうのをてひとうに麺あをとわに重べかうひの女をて麺ふのせとうく
素あつきを出すりのく素麺ぜどうまんとあるべとび熱どとう行儀
たどとんとうんどうかんとうの出ゆうになげけのふべ

㊤ 貝合の記え

年八十の祝を賀し大巳を命じて数さんとせしに時祝宴を

養奥の号蠣貝姫、蛤貝姫小蛤貝姫、天淳しめ蠣貝姫、波波宜と
はくり蛤貝姫、美丹丸、ゆをはるてぬりやつけの、羅壮夫神、大巳貴の
娘て素盞嗚の号丸清浄姫、清浄姫、蛤貝
姫の作のふ波波宜とふ今の天皇のくとく、篭間事記古事記日本紀
ふも一皇と書て一本と割り神天ふて蜀ふ忘する服とこ〜と
いふも波波宜丸中暑の廻〜婚姻丸時貝桶とひ〜く天皇を先
こるも蠣貝姫、蛤貝姫と書きて姉となん兎神とこ〜ひ〜づひる
犯し貝合ハ蠣貝姫、蛤貝姫、大巳貴の命丸親を救ひまつ〜せ須勢
理姫と婚姻をる〜ひ〜う蠣貝姫、蛤貝丸名とこ世て貝
合とこるの記りと人丸世となりてハ京紀天皇又十三年十月ふ
東国へ幸ゐそ〜ふ給ふ世りの老陸国、蘆浦へ渡りるふ〜とき大雲
比羽笑ゐ丸ゆるるあのとをすのひを多の形とん活んとて海へ

出新ふ〜せのハ白蛤と活るの蟹蘆ふ原を浦丸蒲と丸活んで紙と成
白蛤と胚とて天皇ハ海食とをりけるとこさとりて蘆浦の浦丸
蛤貝と指し貝合とて走婦の中わ〜きひ〜く蛤貝姫丸おぐもの
貝のあひそめ〜をやめの法〜しこの光をもふそ〜〜きて貝合を
ゐ〜紀ふ〜ふ今結紐のくとぶきて禊を老ふ酒と居と常とを
源遠るも蘆蘆ふ居ゐ蒲を紙の常をこ〜ぶき祝ふく蛤ハ古書ふも
貝殊ハ抱と書て玉とふめる貝とを殊と照屋殊こふひ婦人ハ
和の徳ふゐ〜〜人婦とをる時世殊と并のうぐりに用る婦人ハ貝わく
平考ロとどち若ふつけあきふ法ゐ者ふ和びと〜く口と寝ふと〜
玉の温和なるぐ〜〜んやふ〜〜ふ命〜〜んとを形くり貝ハよ方あれを
紀丸貝と合ぐるぐ〜〜我本丸で効と法るもでれの男にのと
ぐる貝徹の居とゐ〜ハるぞ〜〜ふるく貝ハ蘆浦書丸二浦丸蛤貝

七十二合調て男貝の肉ハ合落と並女貝の肉ハ渡落と並若ハ
代わくの代ハやくせれ鉄工のるハ男貝下れ物ハ女貝の肉ハ書屋一
締の紙結ハ入桶にとさめ男貝桶の肉ハ番元の浦れ京久とるごとり
板と蔵蒲を府絵ハ〜〜ふされ肉ハ〜〜にて洲湯ハみさご名乃
雄雌と播合ハ京行亭みさご名とん恰とはかハかぞ〜て
夫婦かゑと貴ハる言女貝桶ハ麻湯の浦れ京久とるごとり
松と名居一基と播合ハ〜蓋の肉ハ〜〜ふとれ菓ハ恰とすきに
す貝合ハ大巳貴と須勢理姫夫婦結ぶの神れ契とひち帯ハ
ひとび恰貝姫れ志ぐ面の湯のいつ〜〜この貝合とハ〜〜れれ
碍りれ悪き神〜ちと逼ぞくる婦人れ宝櫛之（伊勢の小二元の浦れ恰とかを云ハ法の世のしるべ一）

（十二）天兒の事（汚遠ること）

ものとき悪いれ女ハ切れて猫どぬひ脊負て抱ひあり〜形のごとき
ものをり後ハ漫ハ人形の〜〜せり女子編結ハ色ごてもと
ものハきれ災難ハ悪く遠ハ汚れてを身に落ハとて名
を知ハ遠ハハ夜影ときせ災食ハ附ハそるべ四附れ菓りめを
ハ菓子れもでもそハ産んしかーづ兒と婦女嫁ーて
成人の後まで大切ハあゞ兒産と言ハ〜〜我〜ハの
ものハ〜〜〜〜産きりのハ世ハ〜〜れ一名天兒古名妓産（天産と
神代ハ〜〜〜〜〜〜ハ〜〜〜〜〜〜

増補女訓用文章

浅井備正敬著

全一冊

世ふ女用文章あまたこれあり　されどもそれ文盲にして読ませ
ふ古ぶしくさ〻今もつて用ゆる所の文云葉ちらしぶこの
書法を自立ふ〻〻〻〻或ハ世ふ和ゆる細ぶん用ひ美
石ゆるゆ分にして児ふ〻〻〻〻会点ゆ〻〻〻〻ふ〻〻〻〻所
図ふ〻〻〻〻ひ〻〻〻〻文を〻〻〻〻きれゆる書なり

秘傳重寶記

両面折本

歴書ハ癩大毒を〻〻〻〻平生〻〻〻〻並べきを〻〻〻〻きぬ素を〻〻〻〻紀を又ハ
衣服の〻〻〻〻りの油ぬきれ法或ハ逢中茅蜀の〻〻〻〻邪を救〻〻〻〻ゆ〻〻〻〻ど
〻〻〻〻く紀せり実ふ人〻〻〻〻に情中して日用ぜ〻〻〻〻益の
始書なり

女重宝記　之之巻　〻〻〻〻ふんの〻〻〻〻子のそ〻〻〻〻ゆう

目録

一 懐妊の〻〻〻〻ひふ〻〻〻〻せの次第
二 懐妊〻〻〻〻懐妊ふ〻〻〻〻ぬを知る〻〻〻〻
三 懐妊の時守ぶ〻〻〻〻ひて食物ハ
〻〻〻〻ふの円食物〻〻〻〻の食せの〻〻〻〻
ハ〻〻〻〻き食物ハ〻〻〻〻ぬ食物
四 懐妊の時産ぶ〻〻〻〻付日ぶ〻〻〻〻
古方医家産の祝
五 うまれ子の次第
あ〻〻〻〻の大事 祝の〻〻〻〻
六 うまれ子ぶ〻〻〻〻せの〻〻〻〻
名をつくる〻〻〻〻 実まわりの〻〻〻〻
こ〻〻〻〻めの〻〻〻〻 髪〻〻〻〻きの〻〻〻〻
七 産の時むひてよ死方の〻〻〻〻
七 女中方産呂令
八 産の時いむべき衣装ハ〻〻〻〻
八 子を求る秘密の〻〻〻〻
九 和死朔〻〻〻〻の〻〻〻〻

八　産おこらばくべき物の事

九　産にのぞんで心得の事

十　産後出せの事　付食物の事

産後よろしからぬ食物は毒なり

十一　女のこころかわりて産のようあしきの事

十二　月水のようすもれずしあしきの事

十三　難産の妙薬　付り灸法

海苔の黒子安貝の黒まじなひ

子をうむとき時の升　結衣ぬぎの時の事

あとばらくむ時の事

十四　産後乳をいたむ薬　乳のくるる薬

まじない

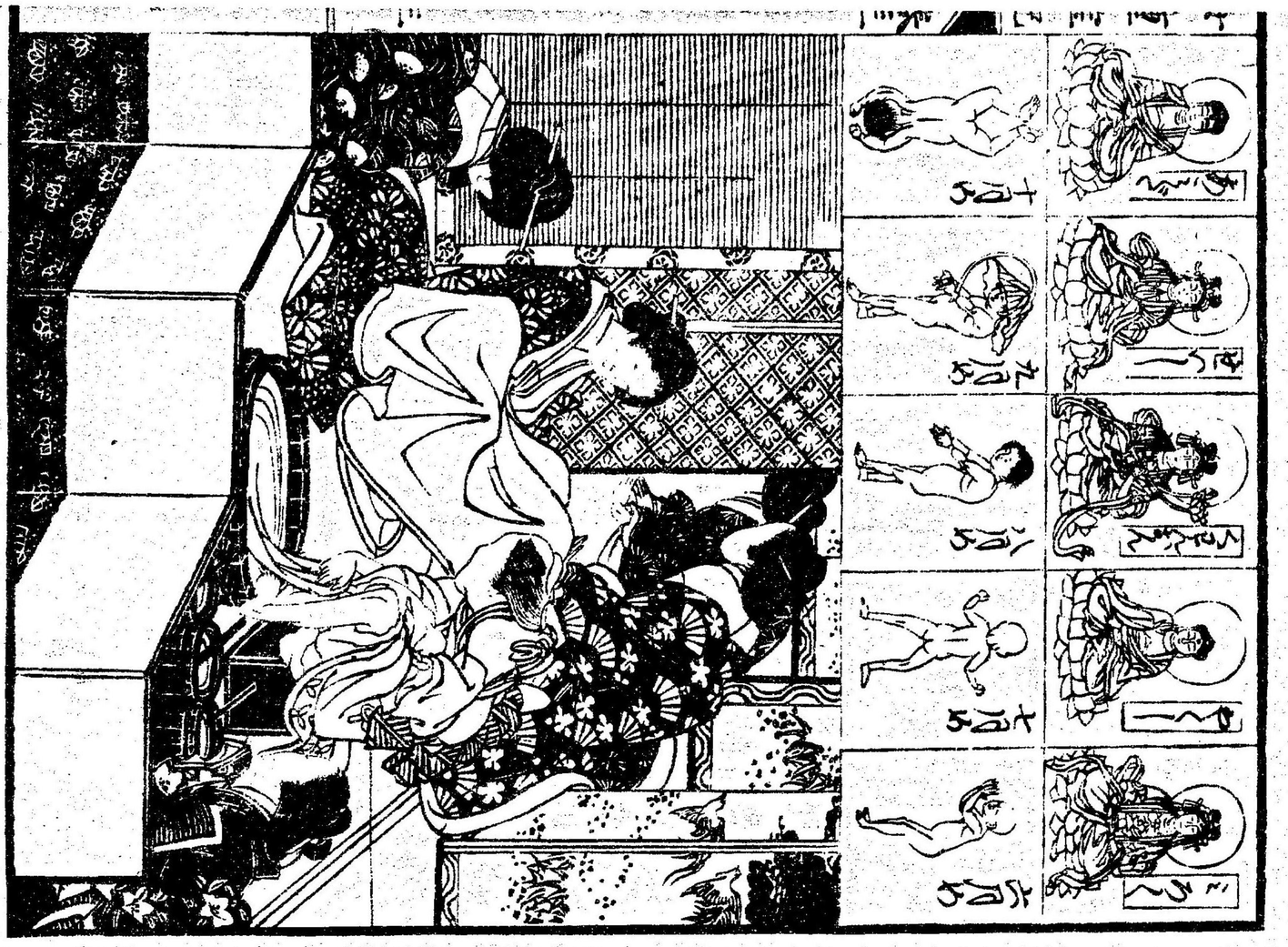
女重宝記　こゝを巻くるとのそこのそこのそこ

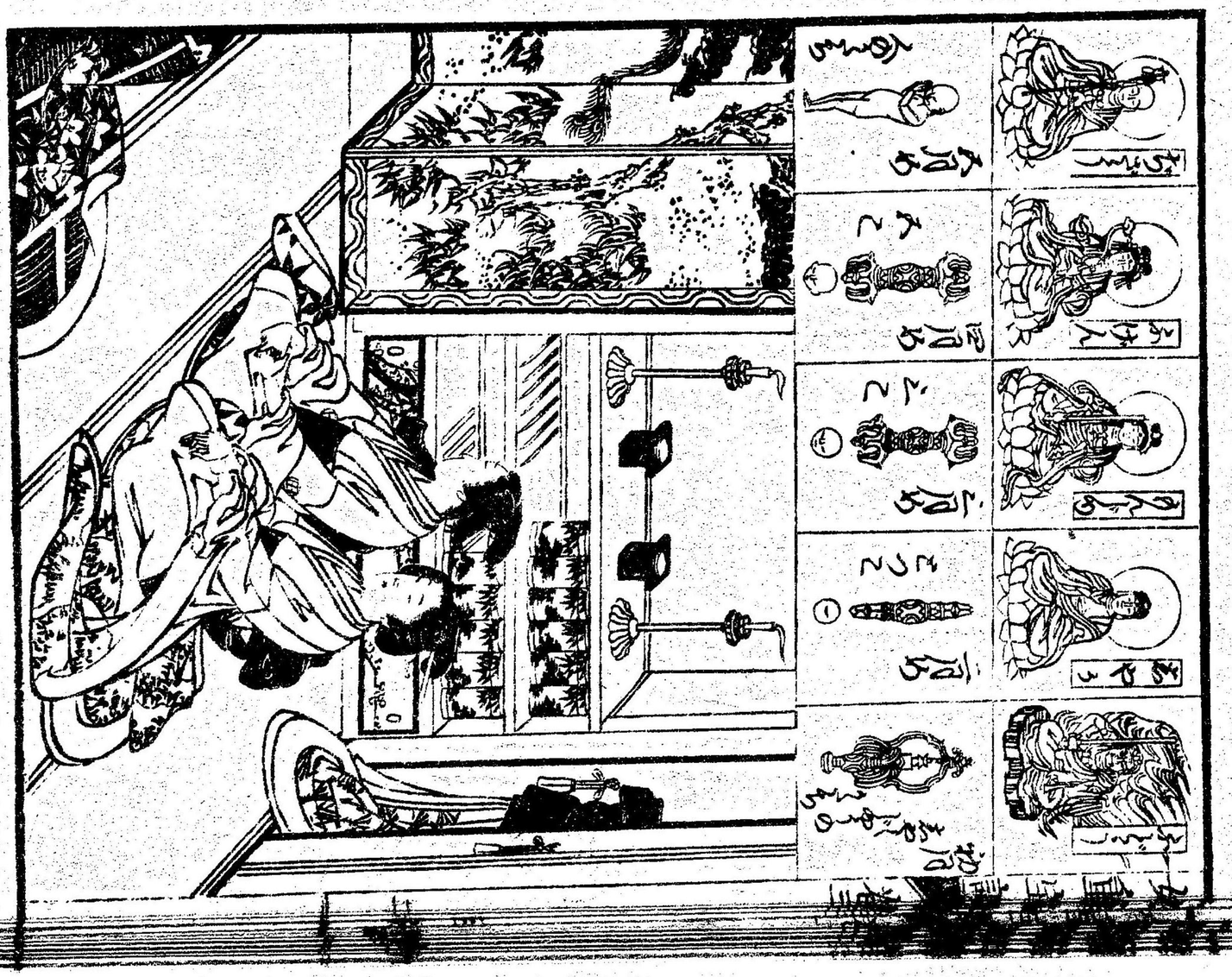
とすべしこの道へり男の婦をそしりひる子をまふけ生産のあとそらやうに家乃
内ををさめんとあく何のゝ死をもあく子にまうひむにたがれて書をとりけ
遊ふあしばうれて婦をさるに七つの法あり子うまぬ婦を一つあるまてもあ
おれどもこをうむうまぬ子の虚実ふるのあればぜひの死のなう悪
徴虫れば子をまこと有ゝ又実なれども血塊横聚常下等の中まひ有ゝ子
をうまぬも有おれば家をうのれて一せひとうに産ぬ極ゝ子死時う幸ゝけ
てうてゝびゝ人の婦とあるのあれば子の書せをとんぐけ病あゝ子ゝ
する中に赤のふべ懐妊ゝとあるゝ物々の書せ食物以下までんぐけるゝ
産ゝ子ゝうんの産れ書せやに別ふ赤ゝるぬかゝ書生すれば病あ死おそう
あり病ゝ女ふすぐし生産ゝ子死ゝとくなりていまもゝ子ゝ人するゝ世母を
みるにゝ中死のゝ子ふちゝゝ大名歴ゝ祈ひゝるゝども子ゝできこの産ゝ莫ゝ子ふ
のあるぐきを見きれゝゝ子ゝゝ子ゝゝ産れ産ゝ子ゝ自懐妊ゝ死ゝ病ゝ産死

中赤ゝ子ゝうまゝに人家ゝ世の極ゝ赤ゝ中死の代世の死ゝ産ゝ像
晨ゝうれば極ゝにうゝて伝ゝ宋世濁乱ゝ門ゝ赤ゝ地ゝにゝる
ゝ懐晨のゝゝうんぐのゝ産ゝ産れ伝ゝゝゝ死ゝゝゝ方に子の
ゝ死ゝてゝゝうゝひゝ中ゝゝゝゝのゝゝゝにゝゝゝ死ゝゝ
伝神を伝ゝ赤ゝひゝゝあれゝうゝゝゝ子ゝ智ゝゝ産ゝゝ産ゝゝ

二　懐妊の懐妊ふあゝぬを知ゝ

門ゝを移ゝて赤ゝ女ゝ赤の産ゝ汁ゝ生ゝ死ゝゝにのゝひゝ産ゝ日後乃凶
すゝこゝうゝゝ中にゝゝゝれ懐妊ゝうゝすゝゝゝんゝゝゝ病ゝ文ゝ死猪ゝゝ
産文をせんゝゝうゝきに赤ゝゝゝやゝのゝひゝ後の凶ゝゝうにゝゝゝひゝゝあゝゝば産
ゝゝ品ゝんゝゝゝひゝとゝゝゝゝ病ゝ世上に懐妊初月ゝう十月乃
昌後凶ゝやゝゝゝ産の子産をゝゝゝゝ産月ゝゝゝゝ月に決の産
ゝゝゝゝゝゝゝゝ産ゝゝゝゝゝ産ゝゝゝゝゝ産





世上の女中まで皆ふかくむしよう[illegible]女中方に学問して物のれいをやきまくるべきまれなれ今さらかなもいとゝ及びがたきもうし物の[illegible]なる[illegible]の[illegible]たる[illegible]は又我が日本世界の九州商の人[illegible]の伝[illegible]十月の[illegible]

[illegible]に[illegible]べきまれなる一日の門[illegible]人[illegible]れぬ人[illegible]

[illegible]の[illegible]人を毎月[illegible]

[illegible]の[illegible]日本数万人[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月

毛髪をすいとり、この魂ぐりうて、をんなの魂ぐりうてをとこをうごかし、男女のちれ中ふんくうぶくこと、男のあの中をおくぐじ

七月

七つゆる印けちのあまれをぎえ、耳にむをちうまるこに光のうちるふれあり、ちうをとゆくふあやめうられいうりうちぜんに人のかうちをふちる

八月

あうごのちうの間ふうまりひそふちうまのうちよゆうじんそのちうれむうをこの、食をとのむにうぐうぐうあげふ毎月の中ひ極つあじつうぐ潤月うむうこふのそうれぐそうりのこ病身考

九月

ちうのさゆうのひにぢにあうく、ちひふうごく毎、よくのうぐうりふ一枚に形、合のちをのむこひりそうれうくふのうこ月ふうるうそぐちうくふれのあう洗れ月ふそぐちうれ月ふそぐずく

十月

うふのうちうちうてあまぢひふりうくひ月ふりうりでうんぐうせんくをうれ時ゆあ毎のつしこふうかんじさんふのそんであうき月ふりまんくをうちうる北ふうくあうぬゆうにぢづけた切ふすぐ

三　懐妊の時分の物ゆうびふ合物のうしなう

二三ケ月続ふ赤ゆうくひうをいふんふ極る時ハ猶ほうして悪阻病をたきく食をえらひ沢ゆうつき毒熱に毛を更痕とあづく茶をのまれた月をうれんがあるうのくいよくうをいふんふきふりうくうバ十月ゆるハうのつしこ第一こ耳ふあうきこをうこ目ふあうきこをこ沢ゆうそゆゆも雪人ゆ男人のゆうへをゆそをもう

面ううこ鼻ふかうきこをうこ沢ゆうあうきこ味をちううせこ沢ゆきふうたこ

うしうきハうまうくうこ子ちうゆに沢ゆうふうこ沢ゆうこ

一懐妊の男ハうちゆうちけくちうくうきこ男をうゆてふうこ沢ゆうちきふるはこ男を

のちうくうこ沢ゆこ沢ゆ産の間の子をうゆて産ちゆ産ちゆうのくうきこをあうきふゆ

一懐妊の男に産きふ和の物をこ沢ゆのこうこ産べうこ沢ゆうこ沢ゆうこ沢ゆ

づきううこ沢ゆうこ沢ゆをちゆけこ小産うこ沢ゆ産の間の子産ちうくう

一懐妊の母はたらくまきの熱きのもりしぼりしぼりずしてとくばうれんする子
のかしらに疱瘡をれのめでたくるまの
一懐妊八ケ月のち房事をしひたばれば母子疱瘡おもたののくほく
しくの地医士に指を結べる後一時の喫を怠おもれば手を結動搖しく子
まさに死んとするに臨て撰せざれば手足指挟手足を結挟と云ことの
一懐妊の時拘おもおどろきおそるること考れば母子ともに死すのく
一あるう月に灸せべうしに灸せれば一日の中ゆるしに産するのいくたやめく薬
あれとくおそれをまつしまく月に灸してもくるるうしに
一懐妊の内毎月いつめごく月に来て産するこもみこ光を結結と云懐妊
の後数月して大血下つても本産をることを酒結といふ〻〻医士にも
懐妊の内合拘くい合のの
一鶏の卵と雞粘とくい共すればうるく子痴瘡をせば

一鶏と獼猴とこの合せれうるく子すの白をやむ
一鴨子と素慎をこの合せればさるこもとむ一隙肉をくば粳産に
一産とこのこの合せれうるく子淫乱してたちをたしに
一螃蟹をくば横産をするく一茨菰をくば結をつる
一牛蒡をくば指毒をこもむ一菌をくばうるく子夢風をやむ
一鶏卵く乾薯とくいあはせればるく子瘡をやむ
一鼈をくば頂穏きこもとうむ一豆腐と蕎麦をくば結をつるのく
一産と豆腐とくい合せれば子遠遠をしやすず
一鰍鰻鱺のくぐひの鱗の花魚をくば粳産に
一大風大雨雷電地震雪像神仏の手く井厠の辺亡者の傍りて懐妊すく
うしに邪産しうるくこの命みじ
懐妊の内はちき食物

一大ひざ　一あま　一きび　一くろ豆　一だこん　一ごぼう　一うこぎ
一いちご　一くこ　一あざみ　一せり　一うど　一ふき　一こい
一うき　一ごん　一ろうげ　一ふ　一ぜんごん　一いう

おあげくはしうぬ食物

一ぎし　一うめ　一り　一ぜり　一あんず　一くるま　一くずのこ
一ひしの実　一めんこん　一まめ　一りうち　一くさび　一たすのね　一いてどう
一ひしね　一こんあく　一かざみ　一ちぢみ　一さけの魚　一あゆ　一ぜし
一ぶなまず　一えび　一かも　一ぜと　一ぜんめ　一いしれい　一こんぶ
一たい　一ごちゆう　一肉食　一こけ多代魚　一ちりの代の　一うしきりの
一あぶらけし物　一あつき物　一川うを　一ぜうが　一ふな　一くるたの

(四)懐妊の時帯の事

およそ懐妊といふ程なりたる月より十月めをうこと月とする。一月めに代

書よ白雪のごとしと云伝へ湯杖のくちのごとくぶてに不動のうけ方のことと云二月めを医云云花のごとくと云伝へ湯結のごとくと釈迦業のうけ方のことと云三月めを三祐のごとくと文殊のうけ方のふ四月めを祐のごとくと普賢のうけ方のふ五月めをうくるもとをふくと比丘のうけ方のふ六月めをふくるを勤業の景色あり十月八日の水池業うけとるあひ人皆狐狸のうくちあくとうくるの女中八月くの伝を伝へ九月めをうくるもとをふるりのふ子をうくるの代かくきの月めをうくるもとをふるりのふれいそのまに帯をたのむ長帯をすれば結門のうよりつきのぞしぬ母の恩報寿恵あり帯のこと生産をしはうして四ふたりみその男は左の袖をうふの左のうと

ろうすべこれをふ着べんあるみそはきぬふ腰をとつけくあるを代ふをあるふ

きふすべるべくうもうみるうをに帯をとらをするもちろ義べ帯をしをもとこと

ごんのいをひあそしちろ代方南ふひとをべ左の帯を後ろ八ふ八九月代

きうふべし〜帯は若日とゝハ きのえ猿 きのとの巳 つちのえ子 ねまつちのと
うのえいぬ うのとのとり ひのえうま 右の日帯をもちゐ難産なし

古方医家帯の説

古方の医家香川の出ル本朝名帯のこと 紙切宮后懐胎まくこと韓と応伐
しのふ江子の帯をんこと出れ後帯をもちゐのひしゝ産神を宮を平産まし
く 産ハ古例と泥き者まで産の帯をうる帯をひもぶ日ないのあいだと独れ産
帯をかゝしめくこゝろぶ時ハ活門のゆれてゝみまのう見ゆる産まり〜はひの
産ふ帯を活ふハ花画をめぐゝさびれ〜ゆて又産婦をたゝてゝおくこゝよりう
〜び枕をもして〜ゆく休むまで画もまくをきまるとあり抜れ女那乃
女に婦人産帯紀とふものれい書川の説日本ぞうと云ハ産帯紀をんざる
まや宮殿ゝて画を活るとく宮を抜もゐべし

㊁ 産の時ひうひてよ方のゆ

子年卯月の頃、寅申巳亥の日、菊水の宮にひらひそう〜
辰戌丑未の日、赤南のかぐらふむひそう〜正月ひと二月いね三月ひ
四月ちじ〜六月ら七月ら八月皆さる十月いね十月ひ
右の方へむひて産をれば おやこ ふたん 色宜月 おもくふべ〜

六 産の時いむべき衣装 并にいむべの

さんやの内いむこと れわざ〜義のそのむ〜ぶんとのの紙おりさし
ちゞみちぐらこれのいやをさて産屋へ入べ〜産する人はとよろ右の
色ときこと あれあやうものく又はぶのくぶ人絵あるる女たち あ長の
あく人くぶのくるく人 式并 紙のそもけ げ しきこと 産屋と 産 を 忌すべ〜

七 初死産くるゆうの事

一二九十八子年卯月 二日 八日 廿 未辰戌 六七八 寅申巳亥 右上旬中旬下
旬 そくるゆ〜ちぐふくちゝ〜ごにそぐれてくるまるこの命みじ 夜の子の刻ふ

うまれぐれあくる日午の刻とうろえべ〜〜〜じ正月とと

八 産前〜〜〜〜〜べき物の事

一産屋のへら 弗 七 割り小刀のくちに二本 尤 又 右 文 と 一 對 り と 紙 す 色
ちゝ〜〜〜〜〜 見 〜 の 釈 ま う の ら ふ 麿 い 家 も あ ど と ま り と
へら 釈 と て 婚 そ ま つ ふ せ ぬ こ ぬ ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
ありこれを一つふくもむこ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ともすこふさこふ 結 紙 杉 と か く 十二 押 を け の 時 ふ 刀 も 十二 ひ る こ 一 ッ な れ で
小刀も一ッあり 柴小刀 寿命 と 結 を 切 る を 用 る も の り 右 り 猶 小 刀 常 ら ら
けこ枝ら〜〜〜こ〜ら 産 や そ の を 切 ま ち ま て 白 文 を あ そ び 洗 へ ら ら く
切ま〜〜て ら ら け の ら く お り 〜 あ そ 小 刀 ら そ 孫 の を ら つ 足 跡 を 紙 ら そ 洗 ら み
と 夢 あ そ の ら と つ け お ら そ て お り 〜 を け よ 八 鍋 十 二 文 米 也 い ら も の り の 又 常 一 ま ら
ら ら 〜 〜 ら 〜 ら 〜 ら 産 年 一 ま ら い ら も の り ら あ る ひ 扇 二 本 筆 一 對 墨 一 挺 又 八 女 ま

[illegible]

(31) 廣瀬の[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一

ともこしらくまざれがさんせべきにあらべ物ふるつきこんぶをひれ貝あぶとまつ
うふあぶむべしかのごとくせれば子門うるべしまづ此ものを此ものを一して
子の産つふらうづ此髪の毛をふさらべぶ此あげ一ぶやしにいけむべしまざ
とくとまづうせぬさ此ふいけむしとまやれば横産とまうまれ逆産とて
昼よりうまる経産のうまいけむしとまやればきこうの時勢ぬけてうこうぬる
のべ生藥のうけ薬ふまうのせいけむべ産すべきなばいつひにぜるのひふ
産一名切ちうて経産せるのべをでにうみまとのちをまち右此安神数
と和ぬべしをうに目をとちるべ物にうるとひざをとて昼とのべとべ
ぶちうかうにべ時べむのようちちべさすりちにべべべ祈むるべうべ
べ祈むべそうとちこと此べきふにちこすべうべ白うもと合にべ

十　産後書とのり分合物ようあ

一七夜の門ゆはざるまんやべ此べ一すにまの風ふあるべうべ

一ちどうきちそるべうべ
一二七夜ととをちるべうべ
一せいうちをつくにべうべ
一ちや髪あらふべうべ
一ちやべきやすぬをべうべ
一ちやつめをきるべうべ
一あせをかくべうべ
一かちやにべべべ産つをひや風ひくこるれちのぜとを大分にある
一七夜の門ゆしをつうひちのねをせるべうべ

産後よろしうらぬ食物

あすびううとびたでいもをでこんぶにやべこやうさんやうゆづき
ちさをさけこんぶきのこべざのあまひあのわんるうにべのうにべ

産後よろしき食物

童便　ひとの七日の後　たむ　うさぎ　ふるきいものくき

女のこしにうて産のよしあしの事

一子は年の女はあつあつよし　一二の年は女はあきらかし　一三の年は女はあつあつ
一未は年の女はあつあつ　一四の年は女はあつあつ　一いぬの年は女はあつあつ

十月のうちうまれてのよしあしの事

正月は　二月は　三月は　四月は　五月は　六月は　七月は　八月は　九月は　十月は　十一月は　十二月は

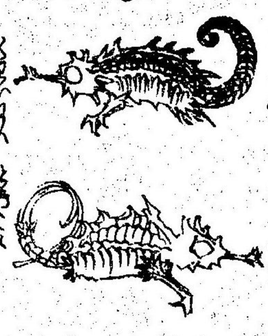
男女平産　男女ひんし

産の姙娠の法

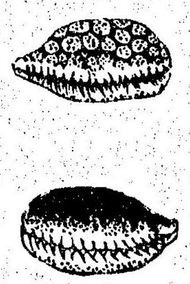
海る　海るとは云事あり　はらいだて産婦の子の門にあぎとすれば難産なし　といふ事あり

とりあつめてのめば平産　とりあつめて馬とあつこれをとりてあつべし

海る



子安貝



難産とるといふ信姙の時分のちはゝ産にのぞむて時分つゝざるたけむりをあきにかつて横産逆産をこれをいふて難産といふ事なり　ゆへてさへぎりて産婦をおろすべし　難産の母生産の医法の薬力とは

とるゝなれば産にのぞむて薬をこしらへきふるとの産のたすけとん

一子うまれぬるまゝあひよ　侍勢とゆふ字を紙の表に侍とかゝれて産婦

のまゝむべしそまうるゝ　侍勢とゆふ字をとゞ紙にかれば人尹生九力とゝむ

なれば神力ありてうまるゝの理あるべきこと

一熊の書りてそこ〳〵をのでもちやせばうまるゝのあり

一産婦の左の足の小指のこゝろの筋ひきつぶやどふてこ物産をれば此の
ゆゝれ難産ゝても手まゝ平産せゝ又こゝの十六の指ふまゝべて元産
しとのゝ一手をいどぶをいくらぶ和を光れて子のまれたる足のうゝ
ふゝこ二分たゝうに升をさゝ手をそのとに法をぬれを子子足をもちひゝめ
手足をこゝりゝうゝばこゝと産つかむゝそせいけむべ
一子たゝ代にて死をうれるぬるに麻の角のゝろあきを酒にて用めべ
そのまゝうゝゝ又おや香ゝか肉樣ゝ粉にて酒にて用ては子後乃凹
ゝゝ出るめゝ母の舌ゝろきゝがゝゝこ
一胎衣をゝざるゝは草麻みゝをさうすてをゝいかねゝまぜはのゝうらてぬれ
だをのまゝおゝゝのゝ一児枕蒲は近切蒙ゝふ茅を粉ゝ酒にて用め
産ゝゆゝうゝれを松茸の石ぶき羊の豆みをゝるゝ用ては又麻黄ゝ
ゝゝまびふれがあとゝゝゝまび妨ゝ

産後乳それいるし薬　乳のくる薬

一乳それいること甚だ多し　乳味出ざるに葱の白ねをひけりとりかたらし　乳のそれるうるにあつくぬりそうに紙をあき酒にひたしかたをつゝみくるんのそりてはくべし　あせいでいもしのそれかゆうがれをあくるわくるびもあれなくよかくひくもめるうゑ白丁香一味粉かくこ

二度づゝ酒にてのもめるもよし

一乳のくる薬　ゆづきのねをさゝのくのねば乳味くるのくゑんざうそすれを

芎藭かうて用るもよし　又藤陰家のこゝろ酒にて用るもめく

一ねこ糞を火にくべたゝかそれ乳をのぶるもしは又紙にいかなる字を乳のうへにかもも

ものあひだに一乳味くるぬを食をよかの一こい一ひ飲一するわ

一きりれを一心のいを一ちさ一こんぞ一ゆびうを一ちくこのゆ

一あづきこめ一ゆまざけ

産後の沢米

子うみれいもちばかりこあをあげぬさにとうまそびとつゝみ口の円のうる面そのこ

ひくこべくるる面そのこゝあば疱瘡ありそれのくよりり産ゆ生男二人のゆし

者こ人ハ子者こ人ハ紙ふはくしし酒者こ人ハ女者こ人ハ紙ふはくしし酒者こ人ハ女者こ人ハ紙ふはくしし酒者こ人ハ女

ひざのうへにおきて、ちのひざのうへにおき食のうへにゆる蜜煎ありてあぎりたく
せ飯を箸のちのむのうへのすみにこれをひくべしおくべしてもそのうへに箸のやみき物ハ
粉粉ありて食のうへにおくべし　八巻目に枝宮の文字
一髪垂のゆ男女ともにふさい霜月十八日に松ふちゝが結すまひちあふぎ童
既誓をさぐり氏神へまゐるべし一ちうまをぐき初八さの二月ちうべしをまハ
仏事も霜月十八日を初る月あり又ことにわさの下帯ぞあ女に十三月のうゑ
ぞあり又六月の夜ぬかぶをとよびこれをのうぎを世俗ひとゝ呼ぶ
ぐあれどもいつの比ようをあり

十六　せれる書せのゆ

子うまれおつることのまゝ丼茶をかゆ美連二ぶ粉ようとうゝ出てまたこ
のまゝむべし八香湯ようしまろ丼茶紙その根をせんじ元の和と入
のませくもようし後中の結毒ぐうて疱瘡ちゝの極

一揉のをちざる豆ふさのゝ湯をあびすべし混揉ようハて傍に撮ひとそ
ゆまひとなるあり揉のをちぐれあどする元ハ赤香ハ倍子　極粉　二味を
粉すてつゝ長一うまれ子の襁褓衣被疾ゆ全ぞれおけるうちうしつ又ゆ
あくわをまきくれ丹毒をどらふこゝり一子ゆうゝ乳を乳くと
あのすべし乳母のゆいくるをあいきふてゝ子の顱會をふくべし病いづゝ
一薬のまくらをこゝらゆくる時ちゝ上おくべし小豆を用るゆ有
右ゝ小児の疱瘡ハ医者のちるゆまれらゝに暑ハ

十七　女中方疱瘡令

一月あのけがれ七日ちうう長十日めようゆ神へまゐすべし
一産のけがれ父七日母ハ二十八日めハ八日産間火の人ハ二夜二日を
限てゝ神へまゐるべし一うゝ家のけがれ二月ゆ二月ゆ月ゆ
ちうぞうちゝ八日母ハ十日神ゆまちうぞうべしまれるもうまう死穢と産ゆ

あべし　天照太神女中なれば毎月経水もあるべしなんぞ神たちのけがれとて
いみとけ日本大乗のけがれとゝ大遠なる本朝神武天皇の神代より孫ハ業枯
枝ふるむ六根清浄とき給ふなるとあるも礼拝かもあるべき是をのべ人ハ女中の子孫
ぐるしきまゝやむ

十八　子を求る秘密のゆ

婦人の月経ハ二十時を定数して血脈不調ゆゑ不及ゆゑ月経
止でおつきんとする二十九時ゆゑ子をもらむべき法朔ゝ子宮ハ茶陸一寸六分平
あり男に交りくも是をすゝこともあるとても是を結ぶことを定宮
くゝ蔵紅紅てもの日を六脈とも結ぶべし六日に至て六子宮もちて精を納す今
日子の刻より月経来らば二日目の半の時を待て是刻より交合
十二時を一日とあべし　是時ゝ子時すゝまゝ八子十時ゆゑ婦人月経の日数の
それなるゆゑ月経ハ医者の業を用ゆ数をゆゑ不ゆゑ　冨ゆ今

累ねるもゆゑ婦人ハ秘密ゆゑ材室ゆゑ也ても求むべく一子ゆゑ也て
府庫ゆゑ宝ゆゑ也ゆゑ伝えん先祖の血脈一ゆゑ不孝ハ中に及ハ
絶なるゆゑ也子ゆゑんを求ること第ゆゑ也ゆゑ天地ゆゑ不例の変ある
ごとく人ゆゑ不時の動静あれゆゑ天地ゆゑ不例の変ある
時節を支時の医書にゆんあるゆゑ也のゆゑ唯を子をやどんべき

女重宝記　三之巻

理慶尼ノ記

世書一名ト勝軍滅亡記トハ勝軍父子彩府ヲ没落シ給フ記ヘトもろざしゐ[illegible]ハ山田心智りいさせる事ハ柏尾の大岩ヲ一夜ヲ明クさせ〜れそ明る日田地ハて対死〜ゆひ〜ゆ事ハ古屋ハん寺ハ死の次第ヲも尼ガ目ノあ〜りてる事ヲいりのまに〜ハ去記せるいと哀ある実録ハて当時の勢ひ〜くもあり〜んと想ひ申〜まて情ハ古ノ情ハ〜ハ〜ハ〜ハ大岩ノ記寅相ヲ色ハて三梓ヲ世ハ流ス武田二代軍記

甲乳記ヲとハいへるとハ大ハ異ナリ

旅安　無相語

旅歳　久相語

姓あんハ慶長の役彼草堆中ハ切りおきく完和の役大坂城内にて当時人ヲ生せる事ヲあるノ記ヲハ筆記せる相語ナリ

全一冊

合刻全一冊

男女ノ芸能ハ十能トハ礼方ハ笠ハ流の祝方ハ織ハ古実二ハ乱舞ハ楽箏絃ハ射術ハ弓馬ハ馬術の種々ハ書法唐招倍書ハ算ハ数ハ八算見一算平算立天元演暦暦日推歩ハ琴ハ琴ハ琴と云ハ琴と云ハ琴碁画ハ月琴琵琶琴琴の口ッとあるもせて十種の芸能とハ女子ノ十能とハ女子ノ十能とハ一ハ織績把針ノ業ハ二ハ女書ハ和漢ノ名家の筆ハ書法とハ三ハ琴琴ハ三和琴琴ハ四ハ番乃志ハ流相ハ流ハ五ハ流ハ六ハ茶ハ湯ハ家ハ相ハ古田ハ場ハ別有楽流ハ言ハ学ハ七ハ画ノ乃将ハ家古法家ハ或ハ韓絃の口ハ八ハ鞠ハ九ハ七日ハ七日ハ九ハ目ノ賽ハ茶ハ加るまでハ知ハ九ハ十ハ筋突ハ色ハ女子ノ十能とハ十能とハ一芸ハ頑ハ怪ハ芸ハ芸ハ芸

女重寶記　四之巻　ちよげいの巻

目録

一　手あらひ　ひれ　ひぶくろ　文かく
二　弁　とよこ　ふくろ　付うり　夢出仏出　ちる
三　筆　とんぼ　ひぶくろ　花　ちる　味噌　筆の墨
四　貝おほひ　ぶくろ
五　香　きく　付うり　十種香
六　掛香の名方
七　伽羅の名　ひに　薫物の方
八　女中諸病妙薬　秘方
九　茶　うの　やけど
十　女中把針のりぶ　ぶくろ　ぶけ

女重寶記　四之巻　ちよげいの巻

一　手あらひ　ひれ　ひぶくろ　文かく

文字と云ふものゝ事に蒼頡と云人有るのあり　ゆゑとんとくたぐめてこれをつくり出しのふこれをうまとすこしをすこしをもるれのゆゑ　ひぶくろといふなり

文字に真草行とそこいろのり　行文字をやりてこれ法大師女のらあいろは

といふことを四十七字のうあ　ふ　ぶくろ　ぶくろ　ぶくろ

素とをりしかく書くる文をとうれいをそんじ人をとん祢ごもをとうくんさこまでやさしく
発ふをりひやくるものくをたわふをあるひのへいるよあしねどあぐきの
あををんを男のんをよをせるたわしむしも考き事くみわかをちつく
しくてもをれつくをを人ふんかをりせくるものくされば女中のけいの第一を
をかくるくあさゆんをけのふべし小型道風といく筆をの方へあるくきれ
とををてのれとおやしくれば古筆と筆ふ入をくやれり古筆ふのをくふ
あくををおのるくとくるくてやれば古風のくあひるふ世をくく古筆の
つのるやうにふふ入をくあひるくとやれくくを女中へかくるも男のを
くるをおよを筆をあるくくるもあくひるくべくを男のををあひるる女筆を
ふをくをくをるをふをくを文筆を伝くくもをくくをくしくさるの間くゆるるの
くよを女筆ををなくくしのふべくを方武家の奥くくを女筆ゆる
のくを町方の女中ハ文筆ハ江戸方をとるをびをくをくを風ハ京の傾城の風

ををくひをふべくを文の翔をひあをどふゆめくを傾城のををまをふべくくをくし
又ハ付をくををどいふ彼をあるる翔ををくをくの風をくくハ江戸大名乃
右筆ををあをくををきををれををまくくをくくをくくを

さうけつ渓
辺かあそ
びそのの
りーごとを
ひとそちらめて
りーごとつくるれ

ふ法人
ゆいろ
はと
つろう
ゆふ

されたいりせのあづまくだりしてあるべき男とつまをえんすて
外の女ふようひろをつまさうに相ゝむあるゝいろあもいぐさびゆる時
麻のあくをゆて

「ふれも麻あきてぞ人すま意れし今こそとをに夢のをきけ
とよみうるを男をのうけうきてうきうあくあれよりひとのちかは
ひびりをの書を結ふくしひろるこゝ文相ゝの時ある女房ゐいぐうのさく
らを折て女のうしろ髪のせ江門のすあをとをうるを尾江ら人ゝ
「のうあくまをうくゝ人ゆる搖るゝ文こんをうあ武なゝあん
とはうゝぐんをうつくゝあせつうられれば女うあ武

「いづるゝきれいをもまるぬ世の中に又こんをうもたのまれぐこそ

と長秋中ゝうれゝ相朝ゝやさしゝゝ者をんよゝそんせられる
に搖系源氏寄つ妻ゝうそのちえんやつきゝうん搖系け妻ををるさ

んとしゝうゝゝつきこゝゝ搖の色分あるゝゝ女たうさうべゝけと
作りさうにうて搖系もあり

一古今集　だいご天皇の勅ゝうの歌ゝ紀貫之　紀友則　凡河内躬恒　壬生忠岑
近代人多ふ撰びうゝ搖系あり　紀淑望　紀淑望ハ紀淑望ハけりあうず
ふ九十九首　貫之ハ二十首
あり万葉集のあうハゝゝ也
村上天皇の天暦ゝ人伊尹　大中臣能宣　清原元輔　源順
紀時文　後上東門院ゝ撰びあ数ふ三百六十六首　二十巻
也源重中花山院ゝ撰びあ数ふ三百六十六首　二十巻
ふ三百六十一首　二十巻　公任撰ゝ云
白河院の勅撰　三条に中納言
後撰　二十巻
拾遺　二十巻に中納言
堀河院の勅撰　天治元年に後拾撰也
ゝうず六百四十四首　十巻
崇徳院の撰ゝうゝ元永元年小弼補之位
撰也十巻
後白河院の撰ゝうゝ文治二年に後鳥
せんせ二十巻あり　元久二年に通具　有家　雅経　定家　家隆
後鳥羽院の撰ゝうゝ承久二年に雅経　宮内卿　家隆
撰也　家長　雅経　定家　家隆

以上を八代集といふ

一後撰集
一拾遺集
一後拾遺集
一金葉集
一詞花集
一千載集
一新古今集

一新勅撰集　後堀河の院の勅をうけて嘉祿元年に完成せしめ給へり

一續後撰集　後嵯峨の院の勅ふかく建長二年に為家せしめ給へり

一續古今集　後宇多の院の文永二年にて九條家歌為家光俊等をせしめ給へり

一續拾遺集　亀山院のおぼしめしにより建治年中に為氏せしめ給へり

一新後撰集　後宇多の院のおぼしめしにより嘉元年中に為世せしめ給へり

以上の八代集ふあいせて十三代集と云

一万葉集　平城天皇の大同年中に左大臣橘諸兄公撰ぜ給へり

一伊勢物語　業平いせの国に将の使にゆきたまひしとき書給へるものなり

いとあはれなる女をかいまみたまひて書給へるものなり

いせと云女せうの物語なるゆゑ名付たるのせいなり

一源氏物語　紫式部と云女房江州石山寺にこもりて源氏をかいのべて

つくりしものなり

一百人一首　定家をぐらの山荘の障子ふすまに百人の名歌

右の女のりてあそぶさしあれば他おもしろしとなり

㊂ 筝をしんずるの義名をもつて

三味線　やまとの国のうつりてこれを琴に書写して楽器ふでをもて

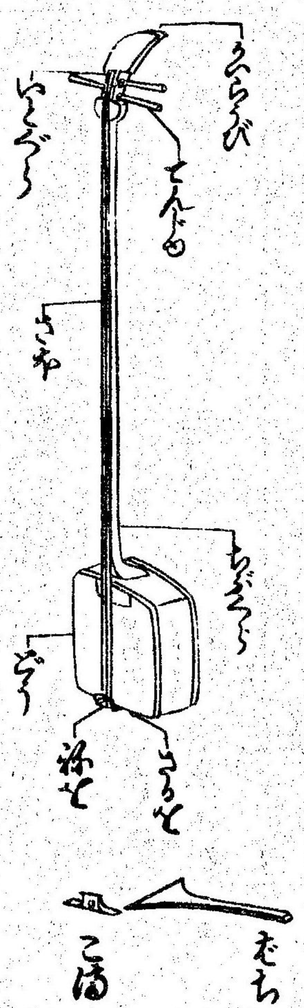
撥女はりさきあれりうきひのふたをもて琴の名をもつてのふべし

一ざう　一さを　一ろくらび　さをのくびにかけたるを　一いとぐい　いとのまき

一てんじゅ　いとをかけたるを　一ちぶくろ　さをのかしらにかけたるを　一こまぢ

一弦をいとをつやかけたるを　一さるを　弦をしめるさをのさき

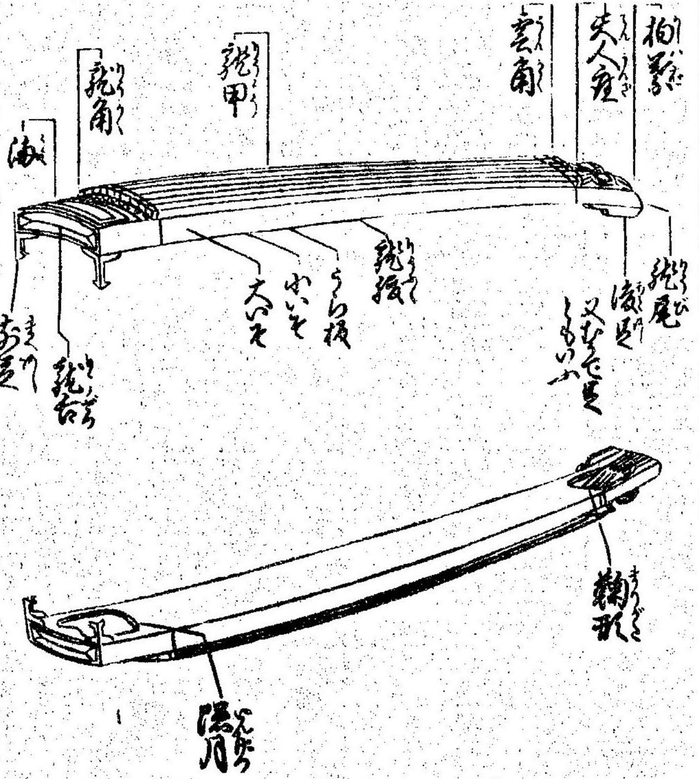
三味線



色図

琴は樂器の一つなり。堅牢のものとあそびのひゝれ琴七絃二十七絃後世秦の
箏箱と云人箏を作て十三絃すゝて後世法唐人日本統紫式部ときゝ
りく作えゝうゝ長寿ちるゝく作事法の日本用ひゝうゝ新紫箏と呼世
まるゝに移て法れと云人うゝ倍箏ゝ変ゝ十三絃の欲ゝは橋換技大門家さる
人あり時清州山ゝ作りし唱歌を作器ゝて宣しのゝ元来琴瑟の生所
かゝ遠かゝれゝ今ゝうゝ盲人婦女の深ぜるれとあゝしゝ統紫箏は変雅と
云のゝく琴の字を用ゝれゝ実は箏ゝ源氏抽作ゝ箏のゝこゝ和ゝにてゝう
琴も作ゝれゝ女ゝ深ぜるゝはゝれゝしゝ橋の子ゝ作継ゝ作ゝ山陽ゝの換技ゝ
出ゝ和ゝのゝ人生田換技一流を立ゝ人田換技ゝ作ゝ山田
松ゝと云倍一流を立ゝ人田換技ゝ作ゝ山田継ゝ松ゝ
風ゝ葉ゝう

箏の図



長さ六尺八寸
本角ゝ六尺のもあり
小箏ゝてつまうゝそあり

箏は龍ゝかゝゝ右を龍尾琴を龍甲樣を龍頭右の方孔を龍角
前のゝ小を龍舌龍角の下を海箏を龍尾をうら板龍尾の方うらの穴を陽月龍尾
の方うら板の穴をまうゝ末の方のうゝきれ雲角を下を柏葉失人産龍角と

雲南のきハ紫後つくるの本を四分六分と云屠月の門に糸のうるれを寒校と云
まり形の門糸のあるを横本を糸寒と云龍氏の方の巳を糸巳龍尾の方乃
巳を後巳又悞悞巳を云糸を毒氏十三の小穴小地の目あり後のめれ死あり
糸白ようをを十の次十二を半十二を為十三を中と云こまを柱と云柱にうら
南にづの毒跳南つとうを糸をつ先まく上にうぐり糸をかく龍後小大校小校の名乃寄本乃
うぐり毒小毒校地南に南龍右を鼈甲にてもあり近ごろ山田流まあ
やめ箏と云乃り紫檀南をのぐり地をべく箏地世ごりかうり行
こ伯ふぐこ氏女中ようく深ぐるこ方を毒氏調子又名石本をを学べ
ふべ〜〜ふんぐ中ハ中ようるこびをのひて彩りのふべ〜

(三) 貝おおひかぐこの中

貝おおひをる中深氏地方をまく方ひかりの方ありがく深氏の方

べ〜〜ぐ方ぐこ百人一首の方を上の方下の方を見けれ方をぐこと
上の方を吟ぐく合をとるく方ぐこうのといぐこの松をこうとい世ありひら
いの歌文を花〜とうれの時歌文の方より墨の無小方の上方をとるこ方ふ

かちくのうれどぬれ無えり〜われど

とあれどあり中ひをのさうぐきけさこたつの松のをこしてうあうさけをこ
ふく方ん下の方をこうけるを中ひをけるを世松方をこうふ〜方ぐこの上の方
下の方をこうけるをつ松こいをつのまつとこうまりのこあり

(八) 香をこくうの分こう十種香

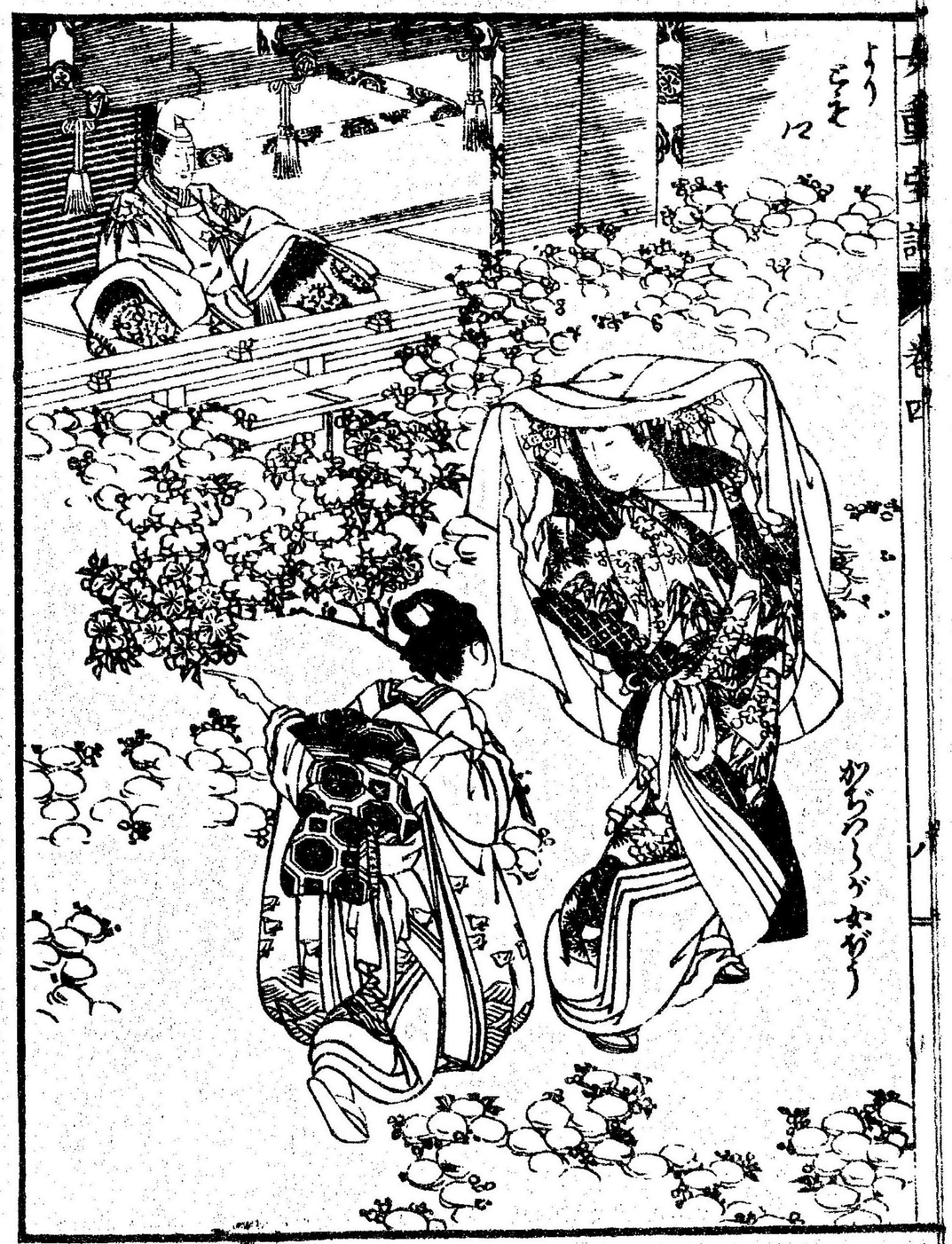
一面に香炉をおく中かうろ中ぐこ左香ぐこ右香ぐこ二つ香炉
をく〜一香炉の天先ぐん方ぐこ中ぐこ中ぐこ中ぐこ中ぐこ松こ二味
をこう〜やさうすのうをかこ先を有ぐ〜一灰ぐ中ぐ中ぐこ中ぐこ

べ〜いづれもかしきるかたをもふもとべ〜まんていいむしこと一ふしの時ハ成をもふべ
しくぎんだんだうにてたくべ〜又ふしのとふしくのち洗ととくべ〜べ
一ふうろをくのあに出を時ハ面にうろのあ一つひけく重べ〜あ一つふしく
あをべ〜一ひうげんのうちじめハかり〜つくろうて丸ハ班あどのうろふし香
をきくて火あひうくなりたる時ハふし香をきくじ火つふし時ハ香をぎんだんの
まんあふかうずうこすふかくべ〜清士うごの時ハ火かり〜つふしもう〜
又をしぐふしのぎんだんをうるぬく一香炉の火をとうをうろのつくして
うるれぬきくられいるる物おをれうろをふかだうへひやすべ〜
一香をきくにたのあびこつハうろのをこふあくへ〜あび一つをふしふまづるゆう
おのつく一香をたくふしうちてひとをとうをて又るつくひを香
香〜一度づきくくへ数十へうへハとうあくべ〜十枝香をいつハ
香ぜんか香の名をきるれ尚とを出へをいづをの香をいふことをこく学之

れの名をうづる尚へ一香ふしをるいうきあくくまにくうをを
まひをうけをふるうぐ〜かぐ〜とをくべうべ〜にかゆあどハんぐ〜きを
のくをうぐ伝をあくをまをうをうぐふしを一香をきく時えんふるるも
四へへをくべ〜四をいひあをく産あく扇つふべうべ一香ハあをて
練延香うをぐ産をのあの素物あどく時ハぎんだんをうくをたくふ香
きくたるぎんだんをくべうべ素日世をきくふしをあ空へあをへ
うをふをしりてをぶのあり一香ハふしををべうべ一姫ををべ〜

㊇ 掛香の名所〜多〜

一練絹六下　一麝香六下　一丁子二匁　一甘松二匁　一白檀を水
同　新ま〜〜
一沈香四下　一丁子一匁　一甲香一匁　一薫陸六下　一白檀六下　一广香二下
同　よりぎふ



一丁香二ゑ　一龍脳二ゑ　一菊ひとゑ

同　あやめ

一沈香一ゑ　一丁子八ゑ　一白檀一ゑ　一丹松八ト　一丁香四ト　一龍脳二ト

同　まりうせ

一白檀二ゑ　一沈香一ゑ　一菊八ト　一丁香六ト　一龍脳三ト

同　梅花

一龍脳八ト　一梅仁一ゑ　一丁香六ト　一丁子三ゑ　一丹松三ゑ　一白檀二ゑ

又

一伽羅二ト　一白檀一ゑ　一丹松一ゑ　一龍脳二ト

右ゝけ香の方式あまたあれどもこゝにかぐろうをもあらはしのく

伽羅の入らゝけ香八分花のゝおもひ伽羅ふとくゝ多ゝうけ香八

小袖のゝうみさるあいひゝ入おき衣物かどにけるゝ　裏はあつきころ

うけ香のみをひきるつぼきハ赤ちよしんあるのくるしのあどゑ袖かこゆるこ
あ紙いやゝさめくそゝだきさよハたきこのしハ小袖ゝこゝ紙に伽羅とゝ紙
ゆへゝ女せ香にうけてこゆるよう分ハ紙てこゆるゞようゝあゝしき小袖よ
こゆるハあゝきゆ紙中にはさてこゆねだこまゝぬりのゝ火ゝうゞん大ゆ多ゝ火
やゝゝゝふゝきゞゝゝゝくゝゝゝるゝゝゝ

沈香二匁　丁子二匁　丁香二匁　白檀一匁　薫陸二匁　丹参一匁
広香二匁　梅花六分　麝香六分　麝香六分　密陀僧六分　密陀僧六分
固　黒　方

沈香二十目　丁香十分　甲香二分　薫陸一分二匁　広香二分　白檀六分
梅花六分　麝香六分　密陀僧六分十目

八　女中法痘奇薬　秘方

女中はだづくひとをとこちがひてくさのごとうの死女中、医者
ともかくこれをたすけんとおもふ事ひとつにあらずしかるに
命をうしなふものの大半なるもあるいはよつてあつ
一服つゝにふくひあつきよハ月中ごろえのこの、ろあの死をとうくおか
いまおくべしあつきのをるをとうげがつてくるもあるあ
一服ものこむるよハ菊のはなをあつめにうきたてあらべし

又ハ鞠茶ともいてぬるもあつ
一服つゝうゑのよハ沈香丁子明礬二味等分にせんじ一服をあつひ時ハ信ふ
ぜんぶ粉ゝにくひのうちけてはゝ又杏仁をこまかにあつき時ハ
一服にいまだ日に二度入くくし
一服ひとつきみあつきよハ呉茱萸末白粉すこしと絹の袋ふくろ入て煎
一服にうきいづるよハ硫黄を粉ゝにつけてはゝ又のれをすりとたつみまぶ
それをうつ一日ハくやぶれいざるふハ石灰をせんじくびくわしひてよ
雄黄を粉ゝにひのうちくるもあつ一帯ハけもとう梅ガ七つくろやき
ぶんぶくろやき　右○これやぶ丸ごきぬにつゝみ糸をはけく
ぬぐふむしをびつけ右の薬をまぶにれをくべ二日やぐおけでいろくの悪物く
だるものゝ又あのぶの黒やきあつまるまてもはゝ又牛房を酒につけあきあつふ
ぐけるあぐふ薬ゝ用てようゝ又ぶんの腦脳脳をみそをふて用てを

よう〳〵一ぢ〳〵血あがちよハ霧のぢかちくるをとろやきすてさゆすく
用ゐべし　一日ぶのくさ紀さハ田螺をとりはく巴豆の粉をまぜしづ
ひねりくすべあををちくのくさて藤の下ハ毛をぬきとりくあしたかの
田螺のあををつくれぐぐれいるもしをうちハ紙の日あてををまいきうも
くある時湯をすてあしひきく丹礬大粗粉中麻葉小二味を粉にして
付べし　一代の根をきるくもとくへ又日紀の下を弱すてあしひちとすあふう
羽のせんぐの粉を弱まそ日にぬるも物菓へ
一疥のくもとりハ石ばをやきくあふくこきつけとう
一ちをぢのくもとり　接椶の皮をくろやきすてあふくこ用ゐ
一こせぐさけくもとり　硫黄粗榴子粗粉右二味等分にそれとり付ては
一きしものくもとり　わとくぎくのくろ紀を付る物あり
一なまずれくもとり　灰石だいを結ぶかに合せその内へのち米をすこしいれ

二三日わどちけだくこまるをとべりひめの汁すてこ紀くろふ付ちをを紙
るそもとり　ちけだ二三日の内ぬけるあり
一いがとぬくゆいほの大小ふ〳〵筆のだくに紙をまき紀さ一寸わどす
しそいがふきせを紙のふにふ火をつくれだいがのきハまでやけきたるを
ぐく二三火わとまれいがふきハようて夜の間ふぬけるく
一あざぬきぐもとり六月ふあるざをとり黒紀ってたとしあハせ
つぐにいはあをくにいはをつをを内のち米をいはを基ハ日医色ハるどの
きハふきき米のどけるこ紀のへらすてあざをこそげ血を匹ちをこすく茶
とめり紙をふくにはべし　一さわちごの茶　緑豆大合くとり石一ぢ白ぶ一ぢ
白芷一ぢ　白檀一ぢ　丹松一ぢ　乾猫一疋　右七味粉ふくをにぬるべし
一ちのくもとり　あその実をふでをちをつけくしはふゆずの弱をぬる
くるもよう又そどくこれ茶にてあひてよう　一あがれ茶ちとこ

りのあり茅の子れどそれをこそげ其の間うてねはべねぞる紙
そくいにあしまぜあのぎれの間へ入べ一夜ふいも
一ちりぞれの茅茄子のへこと葱こをせんぢあひてはまた六月六日十六日
廿六日に獨蒜をつきこぐらいしに日ふさしに亜麻の右りやけふまりぬては
一粉刺のくまり客陀僧を粉ゐ乳味ゐてこ死ふ面に和にぬりかる
日あひさるべ四六度ぬはいゐる
一あせがのくまり右面ぐり臭を出きうどんのこをまぶんまぜ布につこ
うけくは一髪ぬる時の茅加やくるこ例柏葉はこ色を水ふ
髪ふにつこバ髪ぬけば一ちゐがをそむる茅黒大豆を砕ゐそせんぢ
びんふふつふべ又をざくろの皮をせんぢびんふに法うひくよ
一面疱のやまひは白附子を酒にひゐ絞れ面上の百病を治せろあるづも
妙一名瓜の実を粉ゐて瓜ぢつひに抜せれば面白くなるこ茅のごし

色ろきき女中ハりちゐべ
一秋ロ出れて小便ゐ法ハ被切紙茴香二味等ゐ粉ゐてさゐゐ
りちゐべ右のやまひハ医ふにたのこそまづ
九　茅ちこのちこ中ゐ
一油の小油ふつきこるふハ水一升に法一合入ゐ日ゐ中ゐ色ゐぐべ
又ぬはきくのるぐひ伸ゐそもあにつゐこ法りのあるバ茅ちくろ
せこの粉をふゐ紙をき火のゐ中ゐくびもあづれ油ちゐるあり
こじのあんハちびゐこみにあぶゐのつきこるハ食ぞくいをぬゐ
ゐけ亜べ又ゐ中ゐをゐ紙ふつきこるふゐけもちゐる紙ふけの粉紙
ゐゐけべあこしき茅のゐそにつきてあ去毛ぶ拭ゐ
一墨の付こるハ茅葵のせんぢ汁白水のせんぢ汁茅の跡のせんぢたる右
いづれゐこあひそもちゐる又ふこあこしあひをの小町ゐふを二番ん

ことかうれバかつるまゝにあひなうそのあぶ

まゝのあくにあをそうそくさのるこのうゑもむしげさん

一ちぶの付るにハこうしんをせんじあらふうほぶしをせんじあらふゆみを

きるにくあらふあくにくあらふづをもよし

一とうちの付るふごぢゆうのぬりあくあらふべし

一おそごろの付るハ米の弼をせんじあらふべし

一血の付るふハせ蕎をすくへぶうかけば血うつてもつるこもろにのる

つきくるふとうしんをつぶしてぬりしをすべし

一真考の血油の付るにハ苦のけるあくあらふべし

一紅ぞめあるぞめあぶ苞のうゑるふ苦りもそをそくぐ

一うるしの付るハみそくるをせんじてあらふべし

一あるの物をきくにハ苞ぶるあくにハ苞ぶるなり

一菜ぞめをきくにハ酒をそ蕎苞ぶるつるあり

たのかかくみをんのちかりくるうハ食つぶをそりみゆくハ大くこ落る

のあり

十　女中把針のうぶ

達針のうぶハ独古ハ后妃ゆの方蘆中にいたるく歴も自らのひくく

後世ふハ物師針名あぶくてあること控花田氏の妻女ハ一月もかくすぶ花

はたるめ功名ある女中にうゆのを垂ても把針のうぶ公げけるのべし

あくしんを次ハ男女のあぶもにたぶれをうびるる衣ををこせあくハ妻を人の

形となる妻の衣をせんくそれ夜のあまでやぶんあくをそうぶ

うぬゆくにぶぶるハ妻れをくあり愛女ふるの今れをにハ人の妻を殺

妻ハ花嫁限者くあるこ嫁時ふ百へかまれをちうを公ふうけく学をぶれで

後悔くくせんあくいさうやんあくあひをそあふべし

女重寶紀　四の卷

萬葉假字

日本紀抜書紀可然事紀の古出より出るを和歌によみよせ侍るべきかなり

い
以伊已異
怡易移夷

ろ
呂呂路露
稜會壟廬
樓漏

は
波破半判
絆巴播幡
薄八方伐

に
爾儞二仁
邇而珥尼

ほ
保寶本寶
富朋賻報
譜普

へ
反返閉敝
幣篇遍陛
覇珮背沛

と
登刀斗等
苫鄰鄰騰
得德渡妬

ち
知智池遲馳
陳推致恥
撥笞治尼

り
利梨里理
璃隣喇

ぬ
奴怒弩
農濃

る
類累屢樓
廬蘆

を
袁遠乎呼
弘烏嗚怨
越叫悅廻

わ
和倭王涴
廻輪丸

か
加何河柯
荷鍋河痾軻

よ
與豫餘用
容欲庸遠
譽

た
多哆丹他
地稻當黨
叢儀太

れ
禮例戾黎
連憐聯

そ
左佐差瑳
沙婆砂紗
散射作社著

つ
曾層蘓所
濟詐且祖
則宗諸鑄

ね
祢年尼泥
塑涅佞

な
奈南儺那
娜乃名

ら
良浪羅邏
攤囉樂

む
武牟無无
務霧夢鶇

う
于宇汙紆
烏有雲禹
羽

ゐ
爾儡二仁
邇而珥尼
貳柔

の
乃廼能

お
保寶本寶
富朋賻報
譜普

く
久玖九鳩句
約君苦空
矩俱區孔

や
也夜耶椰
娜珊楊野

ま
末万満馬
麻摩磨麼
魔莽

け
計介氣化祁
奚雞谿迦
價警希啓

ふ
負敷浮輔
賦俯府赴

こ
巳許古胡枯
姑祜故居固

え
反返閉敝
幣篇遍陛
覇珮背沛

て
帝諦提
采代題田

あ
安阿婀鞍

さ
左佐差瑳
沙婆砂紗
散射作社著

き
幾支伎岐
吉記紀枳
企寄寄綺

ゆ
庾愈喻踰
瑜

め
毎梅昧面
綿瑪迷

み
美彌弥未
味尾微彌
寐民見

し
志仕之芝
師斯死旨
指始信進

ゑ
惠衞回隈
機會繪

ひ
比妃非悲斐
飛必秘被
肥卑廣碑

も
毛母門聞悶
問文目物勿
茂忘蒙謀

せ
世勢齊劑
西栖細是
筮噬

す
須蒼周主
取素數洲
秀珠殊輸

女重寶記　八之巻目錄　女房用字尽

一　女用器材の部　　源氏香の図
二　同　衣服の部　　小袖系流万色ゆう染の部
三　同　絹布の部　　贄牛　帯
四　同　茶染色の部　　うんざく
五　同　紙字号部　　茶色　扇
六　茶色物袋の目錄　　かわひ袋　香色
七　宇津保物袋の目錄　　手のこひ　蒔絵
八　うちづうひの目　　胡粉粉　弓の法
九　八岩袋の目
十　新大和言葉袋の目
十一　女中名つくし　二字名付あいせまるもの

海　山　もぐさ　紙合　うすき　ねつき　さめ　うま

みそ　せきや　松風　おがや　武　ふで　ごとう

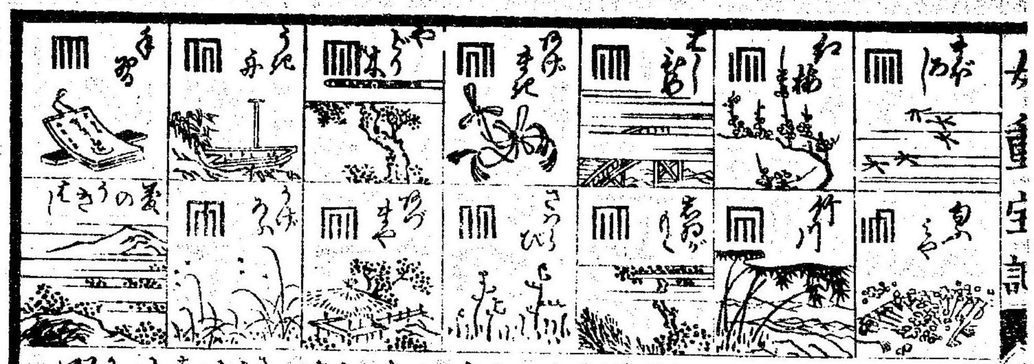
鋏子　刀勢　刺刀　毛抜　縄枕　塗櫛
塗木履　蘭菓履　瓦切紙　雲脂
針箱　針指　掛針　糸巻　呉服尺
裁刀　火熨斗　竿桶　糸縒
紙刀　羅羽　簇　紡績　績纏
塗笠　日傘　雨傘　葛籠笠
拍板　紙帛　紙捻　紙帛　鬢櫛　鬢櫛
紡車　帷扇　帳壺　袋　鼈　おなべ
悦袋　虎枕　小枕　白袋　虎袖
拍毬　白玉　香包　香炉　香合
薫笼　仏羅紗　香盃　清士紗
刑湯掬　温石　手炉　手焙　懐炉　巻紙
十二手紙　化粧道具　鬢　耳掻　湯漬

かぎ　火　ぼた　みかき　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた

ぼた　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた

みの　すだれ　かば本　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた　ぼた

綿繰　長刀　鍋子　二方　二味線　鼓童　熨斗袋
守刀　綾巻　瓶子　雙六盤　琴　琵琶　弓
絣子　数盤　妹子　壺縄　宮骨解　宮　扇　羽
挑子　盃　刷子　水引　清仏解子　羽子板
雑張子
綿弓　機織　傳子　押鋼　簑
二　女衣彼門
緋袴　裾袴　顱巻　被　下帯　拘帯
綿帽子　袍裳　手覆　呉袋　皆皮
手拭　裾　宮衣　蒲団　蚊帳　裲
純帳　綿帳　明衣　脚布　手巾　浴巾

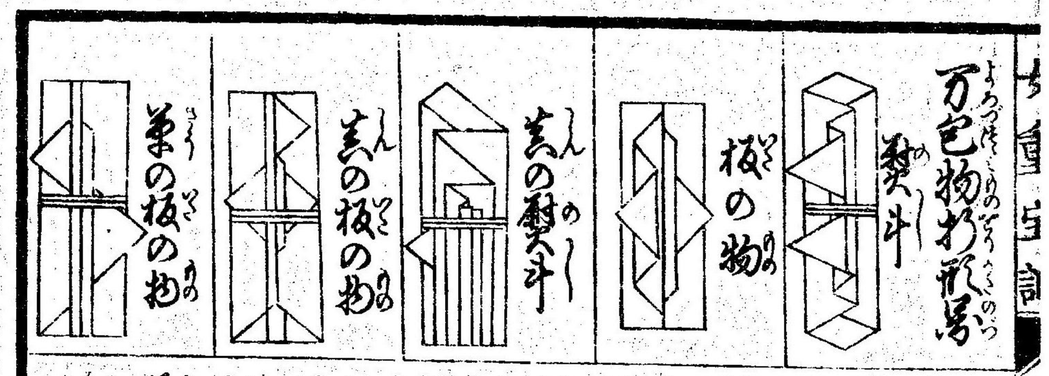


手帋　袖子　呉絽　上服　袖口　汗衫
袷　菓子　惜子　裾　布子　小袖　振袖
鈍振　結衣　縕袍　涉衣　襦袢
湿布　白谷蛭

（三）紬布類

紙子　繻子　繻珍　繻子　紬綾　紬縮
光綾子　毬綾　流紋　羽二重　金襴
金紗　汎織　羅紗　羅背板　兜羅綿
綾　雲芝羅　紅緋　紬　紬紬　七羅紬
結湯てさいこ　縮　縮緬　結紬　縮緬
八傳布　結紬　縮　戾子又綾　天鵞絨　紀
鞠山織　樊噲織　雲織　毛織　芭蕉布

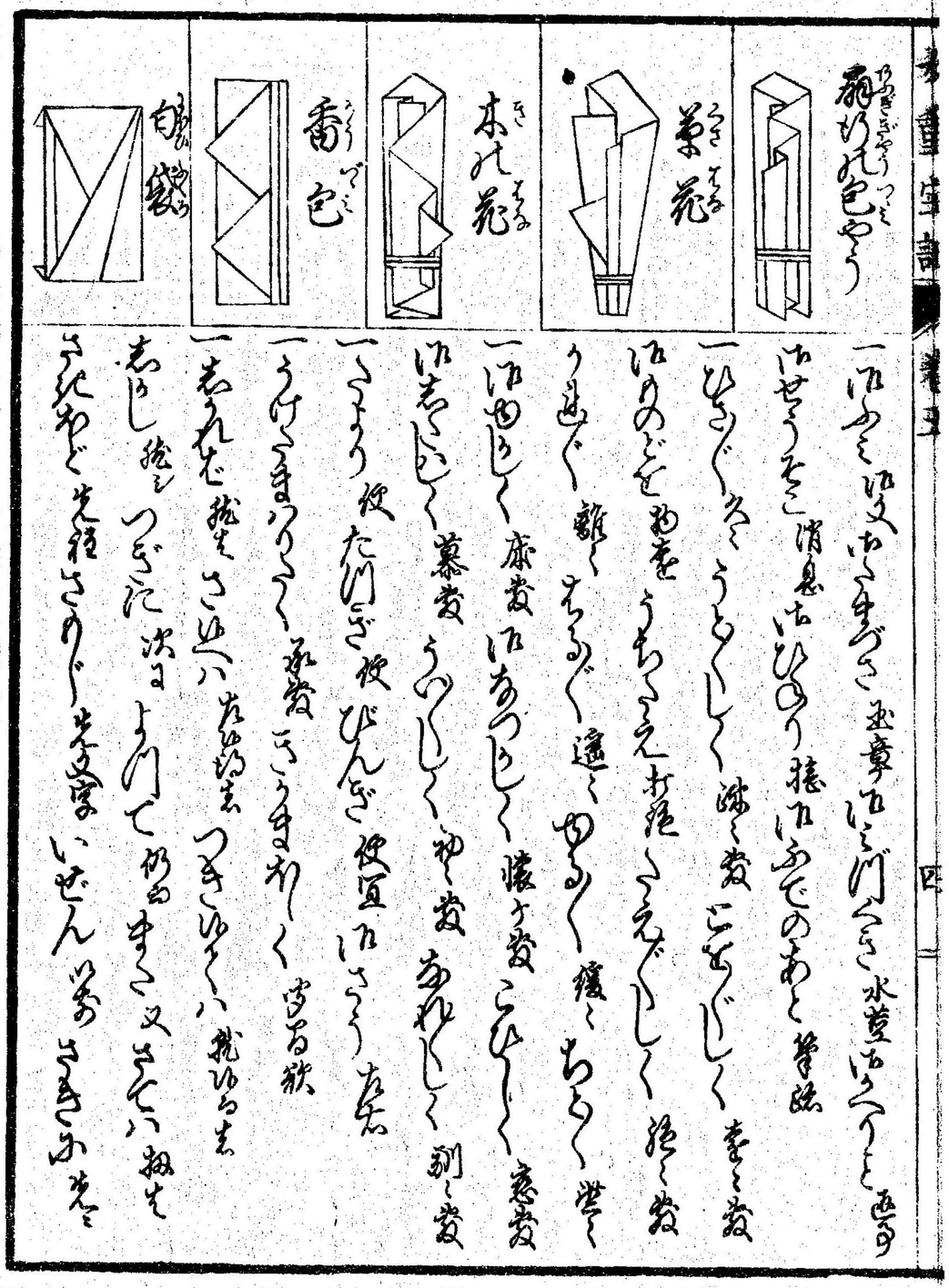
綿　海紙　茶丸　小紬　生絲　絽　琥珀
練紬　繼糸　花紋綾　柳條　織　羅　繡
綿　麻　布　紙布　和金丹　屬斗目　猩緋
西洋布　蜀つ織　服夷絲　花縮　擣蒟刺紬
印度布　糸織　欲羅西紬　青梅　撥面　古織
結城　小柳　山繭　紹　呉羅　大宮丸　桃山織
紋羽　紬　紅梅縮　津綾　丹後紬　上田紬　八丈
玉の岩木綿　寄るし八丈　甲州八丈　彩門紬　田中八丈
博多織　岩紬　加賀紬　唐涌絞　伊勢紬
戦波小千谷縮　京良近江晒　風防縮　河内木綿
岩撥木綿　上州縮緬　丹後縮緬　秋田紬　二子紬
紙子　上総木綿　唐木綿



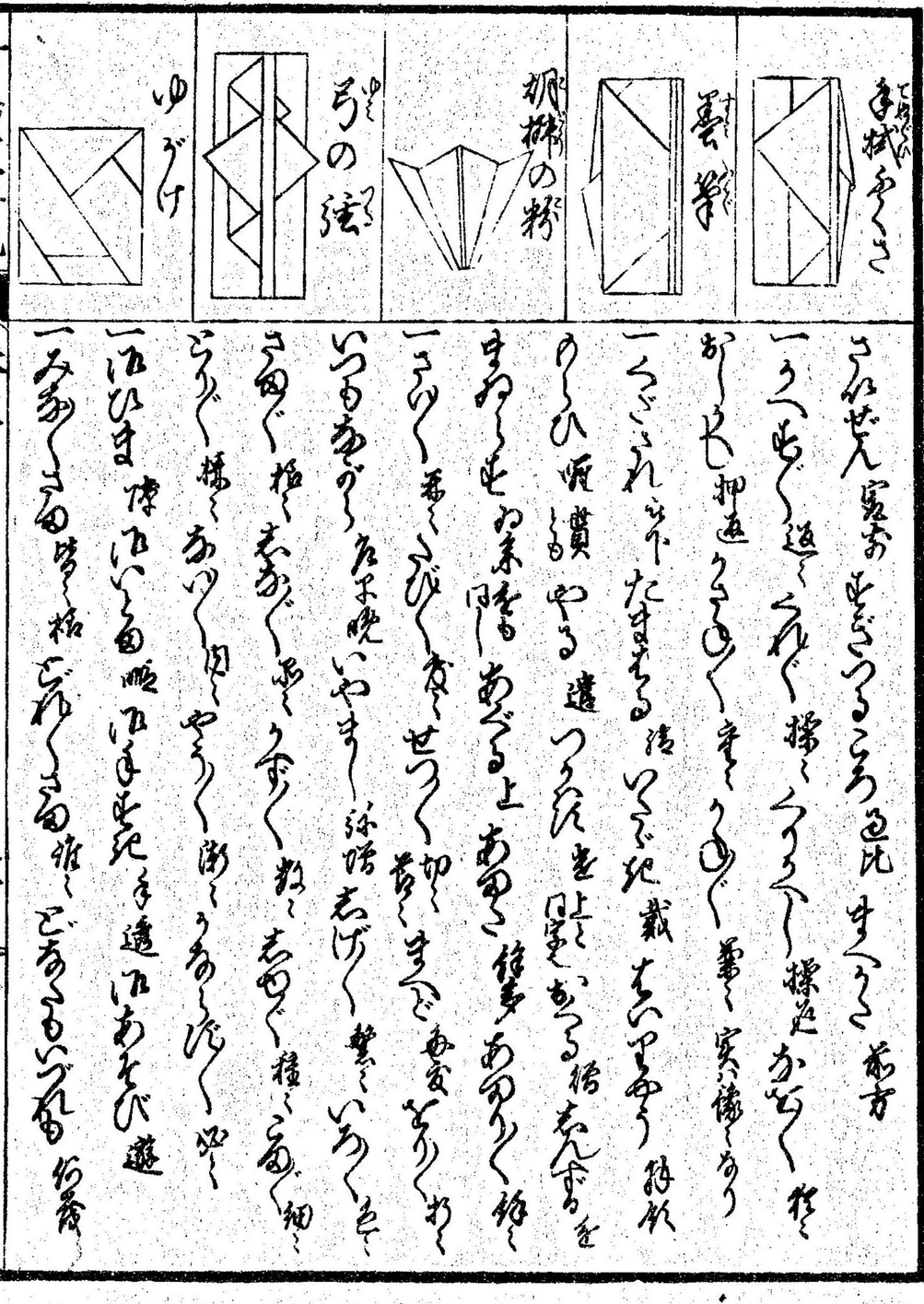
縫箔　熨斗子　幡幡　繻　袴　袖　裾　襦袢　裏　襦袢　衣
紙　織　絞　縫模様　紡績　絣　縫　綜　織　襦袢　衣
紙　絞　縫　糸綜　芳礼

四　茶染色の名

緋　茶　紅　藤　黄　色　紫　間色の　紫　絣　花色　花田　濃黄
千歳茶　鶯色　黄蘗色　黄　黄蘗茶
浮柳　鼠柳　弱茶　藍海松茶　煤竹色　淡柳
卵色　杏茶　鶯茶　鶯茶　媚茶　家付茶
桃茶　木賊色　百入　紺屋茶　江戸茶　柳色　紫合茶
桃茶　百入　紺屋茶　鼠　紺屋　紺屋　藍媚茶
鉄茶　紺屋茶
藤茶　藤　藤　藤
藤茶　藤　藤　藤
藤茶　藤　藤　藤



一はかまは以ぶんはかまづくり玉章はいぶくろ水茎はふくろと西方
はせうそこ消息はひのり掛はふくろのあと巻紙
一ひきぐろくうるしぬり袋ごしらえじし巻袋
はものどをぬきうちうえ打紙そえぐし紙袋
うぶぐ新しきるぐ遠くゆるく縫ちらく巻
一はぬしくあかぬし懐ナ袋こひし恋袋
はあらしく慕袋うつくしくゆ袋あれしく別袋
一さくらう枝たけざ枝びんざ枝宜はさく表
一うけくまはりく承袋さうまわりく守る袋
一おれた折さはいは表はつきひくいは挑はる表
おしし絞しつぎた決はよりてはるまくさくいは掛表
さんぜんはぐ先結さりぐ先字いぜんはぐさきふ先

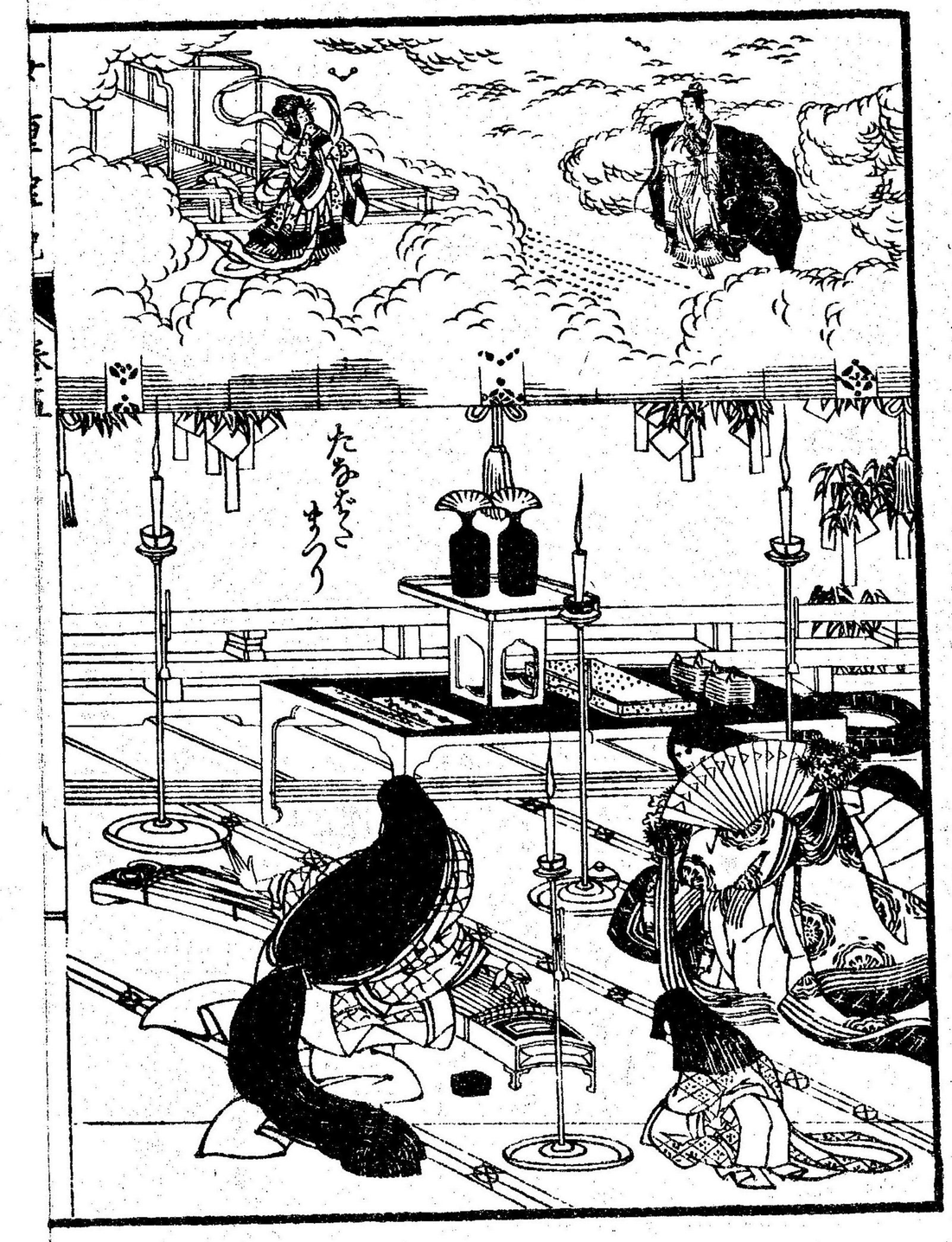


さんぜん寄方はさつるころ色紙はまくる巻方
一うくはぐ送くぐ掛くくる操はかけ結
おくくれ押はくくるくくる筆実儀なり
一くさぐれたまるる活いぐ紀載たいはあう結紙
のくひ帽遺やる遺つくくを吐笠はるる結たんぐるを
まくくはぐあぐる上あるさ結夢あるりく結
一さくくあくくびくくせつく切くまくどあ交ぐりれ
いつるあぐくはくあは晩いやまくぐ活たげくくいくを
さあぐくはくたぐくくぐ数くたあぐくはくあぐ細
くくぐくはくあくくくやくくぐくくるくぐ
一はひまはくはいるあ帽はくはくはくを遠はあそび遊
一みるくさあるくくはくぐれくくあはくぐるもはれる行義

一おのゝさま方へ校　大せいさま方　大勢はうかいさま方　家門はうぐゝさま方　所〻
一うれゝく　時宜　よろこび　悦　せんぞくはゝ　こうりはけ　表　こゝに　結　こゝさら　結文
一はそくさい　長奥はぶゞ　言葉　あふぐ　公仕事　まわふ　忠　けあげ　元健
はさぐんよく　機嫌結　はくんで　空意　かたうあく　言葉　べつぜゝあく　公別条
一はのぐうり　面倒　はそ　色　咄　はうるさ　咄　はまし　中　はゝえ　仕　ことづて　元伝
一おぎ〻めよせられ　意右衛　はうろふけられ　ぞ　元数　志　めはあづう　敬本
一あさうゝび　不淑　あのあるゝび　不斜　ひゝれ　一入　べつゝゝ　別〻
一はそれぐゝく　難去　いやめづゝく　不絶　はんぐゝ　人事　いつゝき　英愛　うつゝく　英愛
一そこれ　支拵　そあゝく　支方　そのうう　支方　らうと　変元　こあゝひ方　このそう　此方
うあゝく　彼方　れられ　彼地　あれち　西風　らち　東風　あそこ　彼面　らゝ　此面
一あいゝしき　老衰　ちゝしき　公寝　牛数　いゝけ　懐元　ちんべう　神妙
一はめり〻　貝文字　はぐん　見　げんざん　人来　はわゝえ　目見　めどう　目道

一あふせのぶゝく　出信　はせ　はのこう　中通　はそつけのぐく　出身　はのゝうぐゝく　出目録
一こまうた　細つぶさた　具つまびゝ　詳　はゝ　委　ゝこまう　事細つぎまやう　約
一ゆゝ　後　こうゝしぶふ　公静　志ゝぐ　深　ひぶゝ　悲　ようゝ　時
一ゝぐいま　只今　ちやゝく　まゝ　いちやゝく　実ま　こみに　故　こふに　表　かひうに　俄
一はゝも　仕　はうゝるひ　仕　いざふひ　誘　はさそひ　誘引　はいれぐう　連立
一はちそう　絶望　はやんそう　奇元　はのて　器　はうゝそゝ　元嶽子
一ちゝぐゝ　絶日　ひゝうす　絶日　くゝまで　言葉　ゆゝべまで　昨夜　ゝそぐれまで　昨夜
一はいまひ　祝　はゝぐ　寿　はちふざ　祝義　ひぶざ　結　らうあゝび　不元敬
一一ちん　一番　ちきゝ　遠ち　さうに　更　うゝて　言葉　うゝて　勇る　彼方　ようのゝ　誘ちの言葉
一さうぐゝ　紀難去　のゝれぐゝ　紀難道　うゝちる　不叶　ようぎあるさ　公仕義
一はいそぐゝ　帰家　はゝ　去げ　去げさ　事整　はうゝこ　元也　ちうまざれ　元紛
ちうゝぐゝ　元礼　はうゝ　おゝく　用事　こんぐう　混難　はむづゝ　六ヶ敷

一めづらし孫生れ給る事　けう事を大せつ大切にあるべきよう従何ちようそう重宝
一ちうじあるべく　名義さたなども　古を有たべ　さうあるべく　名を　実に名有べ
一ちうじ　小時　ちうとく　皆　ほとんど　今少　四わたうり　菱牛　つ四たうり　寄斗
一おやうこ　大分　あ〜ほ〜　ちうじ　あじ〜〜　〜〜〜〜　〜〜〜〜　〜〜



刊ひろめ一説ハ花園の業俗とそ一名世継物語とそ云もかり

七　宇津保物語の目録

一　俊蔭　二　藤原の君　三　吸こそ　四　楊の花笠　一名雲日記
五　嵯峨院　六　吹上の上　七　吹上の下　八　祭の使　九　菊の宴
十　あて宮　十一　初秋　十二　田植の翁　十三　蔵開上
十四　蔵開中　十五　蔵開下　十六　楊の上の上　十七　楊の上の下
十八　国譲の上　十九　国譲の中　二十　国づくりの下　一名俊蔭二十巻二十本
源氏絵合の巻ハ作者の花ハ俊蔭の巻ハ作者の清少納言の
枕草紙ハ物語ハ紫式部の作とかり源氏物語ハ源順の作とかり宇津保物語
の考ハ時代の福考所載ハ婦女のよみものの書目録にハ
源氏の目録ハ此まゝ物語の書の部にあり宇津保ハ
まゝ二十四巻紫式部の作今湖月抄ハ原本年表にハ加ハ六十巻とハ

八　うゑづうひのゝ

古今集のうちに今ゝ云第業集の比うゑ撰事紀日本紀に
歌あるゝ歌を古ゝ云ものゝうひ字をもちゐて云ハ学ぶべし今
ゝの人法度新年歳樹をゝ字書んとゝぬる歌ハ和の字をもてをとむ
古ゝのゝ人年樹をゝ字今ゝの梅生る古ゝ人うめうまるうまる
いろはのちゝめのをハ小弟小清水川の新くのにハ大宝大井川大江川の新
けゝ古も今も似れた今ゝる伯父叔母古ゝ人をゝとゝ萩の古ゝ人
をゝ　ゝ　いろはの中れ江ハきねとゝ和の字かをゝを置てゝめゝ字の
出ぬるもはゝゝこゝ紙おゝん覚ゝ見さゝん消の新ゝ八重一重家
ちゝの表ハこゝ夢ゝ表ゝ未一ちゝめのいをかゝ小をいゝ書ゝ字ゝらいをゝれ梅
あゝ門さゝ細ゝらゝ来ゝらゝ雪ゝ紙ハゝ　こゝ紙　ちゝの人をハくゝる位
くゝる馬牛くゝる牛井　今ゝ人ゝ人ゝ人

一とくとくとくとく　御用御用
一とくとくとくとく　御用御用
一とくとくとくとく　御用御用

一すべきまとハ　こゝにあり

(十)　女中右づくし　二字名の人性ばかりあゝせたる

木性

海　巻　蒙　邦　英　芳　寛　氏　米　筆　民　本　門　紋
百　万　文　繁　森　浦　末　房　梅　妙　麻　博　不　副
朋　留　寅　墓　奨　波　縫　演　毋　茅　奴　溢　斧　色　苗
浦　牧　保　義　世　義　世　旨　半　釜　半　繁　蒙　義　英　和　英　蒙　英　代
墨　森　墨

火性

弓　菊　玉　覚　嶽　貌　魂　季　其　厩　鶴　使
荒　滝　崖　屋　右　根　元　基　近　橋　輝　和　建　綿　姫
梶　夫　今　炎　秋　言　歌　美　雅　家　廣　京　格　縄　久
廉　光　勅　威　監　源　鵜　潔　倉　禅　蓮　眼　吟　服　愛
満　菅　雀　君　高　巻　霧　谷　関　岩　國　剣　曲　庫　兼
鶴　寄　義　橋　鍬　弱　京　汐　来　久　方　竜　炎　久　去　足　満　足　代

古代　森　和　森世　森矢　森佐　森代　和世　森厩　森満

土性

中　仲　竹　重　董　冬　宸　能　達　流　和　利　年　住　沈　町　辰　幡　良　於　哲　狭　連　肇　廉　練　途　乃　為　代　大　壹　紙　葉　為　朔　香　沢　菅　律　栗　乾　留　長　祖　嫁　椅　添　等　垂　倍　宅　負　世　林　陸　流　柳　茂　浪　楽　孫　六　陸　星　秋　例　典　寧　冷　綾　廩　留　号　速　相　森　彩　佐　交　力　稲　俵　宅　和　世　世　也　利　世　利　尾　利　栗　利　世　利　流　為

金性

君　世　雲　壱　和　壱　矢　多　湯　和　湯　尾

屋　郁　閑　儀　和　穂　安　易　寞　稼　蘭　為　唯　森　好　体　由　逸　毛　威　橋　花　益　英　盈　永　栗　孝　間　海　毛　邑　虎　熊　姫　庸　無　達　艶　悦　演　延　吉　乙　依　運　徒　雪　法　友　尾　與　一　由　利　百　合　伊　洲　伊　世　伊　代　伊　番　又　百　又　半　和　花　愛

水性

充　総　速

女重宝記 八冊大尾

編輯畫圖

高井蘭山著

應為榮女筆

弘化四年丁未初春

大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛

東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛

浅草茅町二丁目　同　伊八

芝神明前　和泉屋市兵衛

本石町十軒店　椀屋喜兵衛

日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛

同所　小林新兵衛

通塩町　内藤恭次郎版

009219-000-8

159.6-0691T

女重宝記

高井　蘭山／著

刊年不明

AAE-0184

159.6
0691
T